

# 水の文化

特集

## みずからつくるまち



スポーツ  
コメンテーター  
田中雅美

## 北海道の広い空

私が生まれたのは、北海道紋別郡の遠軽町というまちです。

当時住んでいた家の裏には牧草地が広がり、積まれた牧草によじ登ってよく遊んでいました。

遠軽町はコスモスが有名でとてもアットホームな雰囲気なのですが、その温かさは幼いながらに感じていました。

6歳まで遠軽町で過ごし、その後は父の仕事の関係で美唄市に、さらにその1年半後には、現在実家のある岩見沢市に引っ越しました。

水泳の原点は、遠軽町です。当時4歳くらいだった私は、ケガをした母のリハビリ（水泳）について行き、プールで遊んでいたんです。潜ったりでんぐり返しをしたりするのがとにかくおもしろくて、物心ついたときから水のなかは楽しい場所でした。本格的にスクールに通い、競技

水泳を学びはじめたのは岩見沢にいた小学2年生のころです。

中学校の3年間で記録が大幅に伸び、高校は親元を離れて上京し、東京のスイミングクラブに所属することに。母は私が上京することに賛成でしたが、父は心配から反対でした。当時はずいぶん迷いましたが、今ではあのととき上京してよかったと思っています。

高校3年生のときにアトランタオリンピックを経験しました。それまでは練習や合宿、試合漬けでホームシックにかかる暇もありませんでしたが、アトランタオリンピックが終わったあとで無性に寂しくなり、下宿先のシャワーを浴びながら泣きました。調子が上がらなかつたこともあり、両親に告げぬまま、思い立って北海道に帰ったことも冬なのに不思議と「雪が多いの

に暖かいなー」と、広い空を見上げてホッとした記憶があります。東京に出なければ、気づけなかつた感覚です。

私にとって、自分を自由に表現できる水のなかは、陸にいるよりも楽でした。でも、タイムや順位、メダルを追い求めているときほど力みが強くなるのか、水を思うようにコントロールできなくなりました。そんなときは、プールに行くのが怖いとすら感じたものです。

シーズンオフが明けて練習が再開した時。普段は水の重さを利用して、それを推進力に変えて体が水にのる感覚なのに、1週間ほど練習を休むと水がなかなかキヤッチできず「スカスカ」に感じてしまう。

水は楽しさも厳しさも、私に教えてくれました。

現役引退後は子どもを対象に水泳を教える機会も多くなりました。東日本大震災から2年後のあるチャリティイベントのこと。いつものように子どもたちに水泳を教えていたところ、学校の先生が「震災で校庭が使えなくなつたとき、夏場に子ども





視界を遮るものがない、北海道らしい雄大な景色（晩秋の十勝平野）

たちが体を動かすことができ  
のがプールだったんですよ」と  
教えてくれたのです。子どもた  
ちには恐怖の対象だったはずの  
水。でも、人間にとってかけが  
えのないものでもある水……。  
その楽しさを、子どもたちが少  
しずつでも取り戻してくれてい  
るのならと、その先生の言葉に  
救われた思いでした。

北海道には、今も年に2回ほ  
ど帰ります。着陸する飛行機の  
窓から見える一面の緑や雪景色  
は特有の風景です。千歳空港か  
ら岩見沢までの田舎道で、広大  
な畑の向こうに沈む夕日を見た  
ときなどは言葉になりません。  
反対に、羽田空港からモノレ  
ールに乗り、徐々に増えていくビ  
ルを眺めながら「よし、やる  
ぞ」とスイッチが切り替わるあ  
の感覚も好きですが、それとは  
対極にあるのが北海道です。  
私は特に、本格的な冬に入る  
前の秋の北海道が好きです。で  
も、6月ごろの清々しさもいい  
結局のところ、全部好きなん  
ですね。

（インタビュー・構成／編集部）

#### 田中雅美（たなか まさみ）

1979年北海道生まれ。競泳平泳ぎの日本代表として、アトランタ、シドニー、アテネとオリンピックに3大会連続出場。シドニー大会では400mメドレーリレーで銅メダルを獲得。引退後はメディア出演、講演会、トークショーや水泳教室で全国を回る。2020年1月には第二子を出産。仕事と子育てで奮闘中。

特集

# みずから

北海道の旭川空港から車で10分ほどの場所にある東川町<sup>ひがしかわちょう</sup>。この人口減少社会にもかかわらず、近年は人口が増加傾向にある。また、約8300人の町民全員が地下水だけで暮らす、日本でも珍しい町だ。

過去およそ25年以内に転入した「移住者」比率は56・6%。つまり今の町民の2人に1人が「よそから移ってきた人」だ。移住した人たちは、東川町にどんな魅力を感じたのだろうか。

一方、もともとこの地に住んでいる人たちは、1985年(昭和60)に「写真の町」を宣言するなど一風変わった施策を講じるこの地にどんな愛着をもち、地域にかかわっているのか。

美しい大雪山連峰に育まれた水を守り、教育に力を入れ、住民主体のイベントも活発な東川町を探り、今後の地域社会のあり方と、そこに「水」がどうかかわるかについて考えたい。



## Higashikawa-town

人口は8328人、世帯数は3879世帯(2017年12月31日時点)。面積は247.06km<sup>2</sup>(東西36.1km・南北8.2km)。

北海道のほぼ中央に位置し、北海道北部の中核都市・旭川市に隣接する。日本最大の自然公園「大雪山国立公園」の区域の一部であり、大雪山連峰の最高峰・旭岳(2291m)は東川町域となる。

1894年(明治27)、旭川村字忠別原野の殖民地として区画整理が行なわれ、1895年(明治28)に香川、富山、愛知、徳島県人などが入植し開拓が始まる。1897年(明治30)12月、旭川村から分割して東川村と称するまでの2年半は旭川村の一部だった。

「平成の大合併」(1999年から政府主導で行なわれた市町村合併)では「単独自立」の道を選択した。

# つくるまち

## 目次

### 巻頭エッセイ

- 2 ひとしづく 北海道の広い空 田中雅美

### 特集 みずからつくるまち

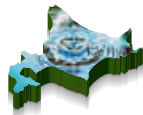
- 6 概論 「まちづくり」に今、必要なもの  
— 東川町に行くと未来が見える 鈴木輝隆
- 9 移住者の実像 東川で暮らす
- 19 写真文化首都 今日の東川町をつくった「写真の町」宣言
- 22 街並み・移住 みんなでつくる街並みと移住促進策
- 24 地元民 考えつづける「東川らしさ」が未来をつくる
- 26 イベント 町民の幸福感を増す「イベント」
- 28 農業 耕作放棄地のない道内有数の稲作地帯
- 30 まちづくり 水と人が巡るまち  
— 町長に聞く「東川町が元気な理由」<sup>わけ</sup> 松岡市郎
- 34 地下水と水道 地下水を持続可能にする自然の恵みと人々の努力 滝沢 智
- 36 産業づくり 岐阜の杜氏が惚れた東川の「水」と「人」
- 38 周辺地域 一本芯が通っている町—周辺から見た東川の評価
- 40 文化をつくる 北の大地の小さな町で「未来への開拓」進む 編集部

### Column

- 43 水の余話 現代に生きる海中渡御 陣内秀信

### 連載

- 44 水の文化書誌 57  
南北朝争乱期における筑後川の戦い 古賀邦雄
- 46 魅力づくりの教え 16  
〈つくる技術〉が受け継がれる森のまち 中庭光彦
- 50 センター活動報告
- 51 編集後記／ご案内  
(敬称略)



【概論】

# 「まちづくり」に 今、必要なもの 東川町に行くとも未来が見える



インタビュー

鈴木輝隆さん

資源家(地域クリエイター)  
江戸川大学名誉教授  
ローカルデザイン研究所【BEENS】  
代表

Terutaka Suzuki

1949年名古屋市生まれ。北海道大学農学部卒業。神戸市役所、山梨県庁、総合研究開発機構主任研究員、江戸川大学教授、立正大学特任教授を経て現職。地域経営論、ローカルデザイン論を研究。著書に「ろーかるでざいんのおと 田舎意匠帳—あのひとが面白い、あのまちが面白い」「みつばち鈴木先生—ローカルデザインと人のつながり」などがある。

人口減少、少子化、高齢化、財政難……日本、特に地方都市を取り巻く状況は厳しい。だからこそ人口増を実現した東川町には視察団が引きも切らない。いったい何が注目されているのか。全国を飛び回って地域と人をつなぎつづけ、さまざまな地域でプロジェクトに携わる「みつばち先生」こと鈴木輝隆さんに、現代のまちづくりの概況と東川町の位置づけ、これからの地域社会をつくるために必要なことを聞いた。

## 1970年代に本格化 日本のまちづくり

私は、魅力的なまちがあると聞くと実際に足を運び、地域の人と話をすることを40年以上続けています。北海道滝川市のまちづくり仕掛け人、水口正之さんの案内で初めて東川町を訪れたのは2001年(平成13)の5月です。「写真の町」「木彫看板設置事業」などに取り組み組んでいて、おもしろい人が多い。興味をそそられて、今も通い

つづけています。

東川町の人口は増加傾向で、特徴的な移住者も多い。そのため地域活性化の成功例として注目されています。

それはなぜなのかをお話する前に、活性化を目指すさまざまな取り組み、いわゆる「まちづくり」を時間軸から考えてみましょう。

日本でまちづくりが本格的に始まったのは1970年代です。嚆矢となったのは、住民主体で音楽祭と映画祭を開き、文化人も巻き込んで知名度を高めた湯布院町

(現・大分県由布市)、そして日本初の自治体経営によるワイン製造が「十勝ワイン」として認知された北海道の池田町などです。その後、各市町村が1つずつ特産品を育てることによって活性化を図る「一村一品運動」が大分県で始まり、全国へと広がっていきます。一村一品運動は六次産業化の先駆けです。

その後は「住民自治」が注目を集めます。北海道で代表的なのはニセコ町です。全国初となる自治体の憲法「ニセコ町まちづくり基本条例」を策定し、住民との情報共有化と住民参加の取り組みについて、制度として保障しました。

こうした一連の動きのベースには、社会学者の鶴見和子さんなどが1970年代に論じた「内発的発展論」があります。簡単に言うと、中央政府主導による地域開発ではなく、地域固有の資源を活か

し、地域住民の主導による自主的發展を目指そうという考え方です。

## グラントデザインと 長期ビジョンのない現状

一方、日本政府は1962年(昭和37)に「地域間の均衡ある発展」を目指し「全国総合開発計画(略称全総)」(注1)を策定しました。これは日本の国土政策の基本的な方向を示すものとして計5回作成されましたが、2005年(平成17)の法改正に伴い、全総に代わって「国土形成計画」(注2)が策定されることになりました。人口減少などさまざまな変化に対応するために設けられたものですが、私 の目には「国土をどうするか」というグラントデザインがなくなっ てしまったように映ります。さらに、2011年(平成23)の

(注1) 全国総合開発計画

国土の利用、開発などに関する総合的かつ基本的な計画で、住宅、都市、道路などの整備のあり方などを長期的に方向づけるもの。「豊かな環境の創造」「人間居住の総合的環境の整備」「多極分散型国土の構築」「多軸型国土構造形成の基礎づくり」など時代の要請に応じて策定していた。

(注2) 国土形成計画

日本全国の区域について定める「全国計画」と、ブロック単位の地方ごとに定める「広域地方計画」からなる。

地方自治法改正によって、市区町村に策定を義務づけていた総合計画の基本部分「基本構想」が、つらくなくてもよいことになりました。しかし、基本構想はその地域の長期ビジョンの根本となるものです。この部分をなおざりにすると目先の利益を優先しがちになり、もつとも重要なその町の「未来を構想する力」が失われる危険があります。実際に弊害が出ています。

例えば六次産業化なら、地域全体をどうするかというダイナミックな構想のもと自分たちでアイデアを出し、どういう方法をとるか決断して進めるべきですが、その実行力が弱まっています。逆に「住民自治さえあればいい」「インバウンドに期待してとりあえず何かやろう」といった場当たりの施策が目につくのが、日本のまちづくりの現状です。

しかも、ある地域が一時的に活性化したとしても長続きしないことが多い。なぜなら、人が訪れるようになると、店主が商売を放ったらかして不動産業に勤しむようになり、商店街がすたれるからどこにでもあるようなチェーン店や土産物屋に店舗を貸すので、商店街が俗化して魅力を失い、地域の元気が失われていくのです。

そして、各地で今もつとも苦勞しているのは「合意形成」です。新しいことをやろうとすれば反対派が出るのは当然ですが、日本全体が高齢化していることもあって「別に新しいことをやらなくてもいいじゃないか」という保守的な人が増えました。そういう人たちが巻き込んで合意形成する段階で疲弊してしまい、いざ実行となっても力が出せない状態です。

計画を外注するので、新しいアイデアがなかなか出てこない。徳島県の神山町など一部の地域はがんばっていますが、その数は少ないのです。

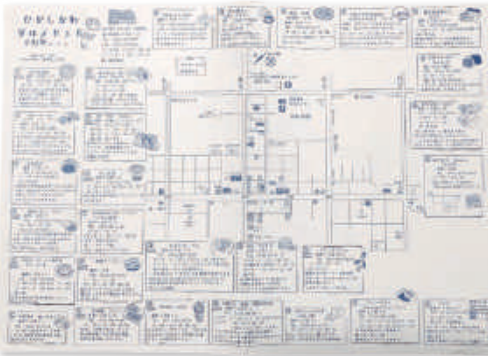
### 一人ひとりの夢を 大事にする風土

従来のやり方ではうまく回らないこの状況で東川町が目ざされているのは、地域でアイデアを出し、決断して実行に移す力が秀でているからです。

## 東川町の話をする と「行ってみたい!」とみんなが言うのです



良質な地下水に恵まれた東川町を象徴する「大雪旭岳源水」の源泉。湧出量は1分間に約4600L



新規出店が多いため、頻繁に改訂する手描きの地図「ひがしかわグルメMap(市街地編)」。旭川空港や道の駅ひがしかわ「道草館」で入手できるほか、ひがしかわ観光協会のHPからもダウンロード可能



図書室、大雪山関連資料、写真コレクションなどからなる文化施設「せんとびゅあII」。これも東川町が未来を見据えて行なった事業の1つ



しかし、最初からそうだったわけではありません。1985年(昭和60)の「写真の町」宣言は、町政100周年に向けた一村一品運動の一つで、外部のコンサルテイング会社からの提案を採用したものでした。その会社が倒産してしまつた。自ら動くしなくなりました。そこで初めて人脈やネットワークの重要性に気づきます。

東川町は合意形成や進め方がとても上手です。町内のさまざまな立場の人を集めて「こういうことをやりたいけど、みんなどう思う?」「財源はこれを使える」「こういう点で協力してほしい」と呼びかけて「さあ、みんなでやろうじゃないか」とスタートします。

また、なんでもいから店を出そうともしません。いい意味で「店を選んで」招き入れています。すべてではありませんが、店舗が空いたら町が買い取り、公募のような形で入店者を募り、応募してきたら調査する。そして「この人なら」と見込んだ店だけを誘致するので

す。よその町では空き家を斡旋する程度ですが、工事が必要ならば東川町が改修

したうえで引き渡します。

そういうバックアップがあつて、新たに起業した人や店の9割は黒字経営と聞いています。民間の個人住宅にも助成金を用意して、移り住みたいという人たちを大切に迎え入れていますね。

一人ひとりの夢を大事にする。そういう風土の町でもあるのです。

### AI時代におけるリアリテイの重要性

今の日本は、あらゆる分野で前例にとられず実験をしていかなければなりません。東川町は常に新しいことに投資し、実験を繰り返しています。

近年は「企業版ふるさと納税」と個人のふるさと納税「ひがしかわ株主制度」で外部からの投資を呼び込んでいます。コッコツと自分たちのまちをよくしていこうとする従来のまちづくりを「貯蓄型」とするならば、東川町は人脈やネットワークを駆使する「投資型」といえるでしょう。

実は、先ほどお話しした「内発的発展論」は、時間が経つにつれその意味が矮小化されたくらいがあります。内発的とはたんなる地域内の自給自足ではなく、「地域外

の人材や資金なども呼び込んで、自分たちの町をよりよくしていく」という意味も含んでいる。東川町の取り組みは、正統な内発的発展論に基づくまちづくりの新たな方向性を示しています。

AIの進化で次の社会がどうなるかは誰にもわかりません。バーチャルの進化に可能性を見いだす人も多いでしょう。松岡市郎さんが東川町の町長として最初に行なった事業は、大雪山旭岳源水の遊歩道「源水歩道」の整備でした。周囲の人は「なぜこれを?」と困惑したのですが、「水」を東川町の象徴的な存在として取り上げることで、環境のよい町、景観のよい町、水道のない町というブランディングにつながりました。

大雪山がもたらす豊かな水、そしてその山々と水田が織りなす美しい風景、それを借景として広がる瀟洒な住宅街と点在しつつ増えている個性的な飲食店……。東川町は明らかにリアリテイを重視していることがわかります。

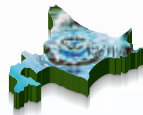
こんなふうに私が東川町の話をする、聞いた人はみんな「行ってみよう!」と言います。東川町に行くこと未来が見える——そう感じるからだと思っています。

(2020年12月24日/リモートインタビュー)



【概論】





【移住者の実像】

# 東川で暮らす

東川町の人口は1950年(昭和25)に1万754人を記録して以降減りつづけ、一時は7000人を割り込んだ。しかし、1994年(平成6)以降は増加に転じ、2014年(平成26)には42年ぶりに8000人台まで回復した。増加傾向となったところと2018年(平成30)を比較すると、町民の2人に1人が移住者だったという調査結果がある。  
移り住んだ人たちは、どんな経緯で、東川町のどこに魅力を感じたのか。暮らしの実感をお聞きすると、「水」「楽しみ」「自然」というキーワードが浮かびあがった。



水

1 中国茶と相性のいい水を求めて

2 一杯のコーヒーが地縁をつなぐ

楽しみ

3 雄大で美しい風景が決め手

4 「楽しみが近い」町で子育て

自然

5 大自然のなかでのびのびと

6 五感を潤す水の景色に惹かれて



東川町の水と米でつくった「奥泉」のおかゆ

# 中国茶と相性のいい水を求めて



1

## 理想に近いお店が見つれると思えました。

移住者の  
実像

# 1

斉藤裕樹さん  
奥泉富士子さん

市街地の外れにひっそりとたたずむ、隠れ家のような建物。木々に囲まれた店のドアを開けると、オーナーの斉藤裕樹さん、奥泉富士子さん夫婦が穏やかな笑顔で迎えてくれる。

ここは、中国茶とおかゆと点心の店「奥泉」だ。中国茶インストラクターの奥泉さんが惚れ込んだ、中国福建省の武夷岩茶という希少なお茶を専門に扱っている。

二人は東京で仕事をしている時に出会った。斉藤さんは新潟、奥泉さんは埼玉の出身。結婚後、中国茶の店を出したいという夢のため、飲食店で働いていた斉藤さんが点心を学び、2016年に独立。札幌の円山地区に念願の店をオープンした。北海道を選んだのは、温かいものを出すなら寒いところがいいと考えたから。

ただ、武夷岩茶は非常にデリケートなお茶で、水が違うだけで味や香りが変わってしまう。札幌の水とは相性が悪く、本来の魅力が

最大限に引き出せなかった。

「それで道

内各地の水を試したのですが、武夷岩茶はもともと岩山に生えているお茶なので、ミネラル分の多い東川の水と特に相性がよかったんです。東川にはお米もあるし、景色もいい。自分たちの理想に近いお店が見つれるのではと、移転を決心しました」と斉藤さん。

納得のいく物件が出るまで2年ほど辛抱強く待ちつづけ、ようやく今の店に出会った。そして2020年1月、東川の地で「奥泉」は新しい一歩を踏み出した。

斉藤さんがつくるおかゆは、米と水だけで炊くシンプルなスタイル。東川産の米をおかゆ用に特別に精米してもらっている。

「おかゆは米と水の産地が同じだと、本当においしくできるんですよ」と斉藤さん。うれしい誤算だったのは、点心の皮がきめ細かく



札幌時代のリピーターも訪れる「奥泉」

1「奥泉」が提供する中国福建省の武夷岩茶。東川町の地下水が味と香りを引き立てる 2 斉藤裕樹さん(右)と奥泉富士子さん(左)。敷地内の納屋を改修してミニシアターを開く夢も抱いている 3 スタandardなおかゆセット



2

4  
5

# 2 一杯のコーヒーが地縁をつなぐ

移住者の  
実像

「ヨシノリコーヒー」は、田んぼの真ん中にながら本格コーヒーが飲める東川の人気スポットだ。もともと旭川に住んでいた轡田さん夫婦。夫の芳範さんはコーヒーの焙煎が趣味で、ドライブがてらよく東川に源水を汲みに来ていたが、ある時「売り物件」の看板を見つけて、ここに店をつくった。おももしろいだらうと考えた。人気物件だが農地転用の難しい土地



(上)ドリップする轡田芳範さん。今は会社をやめて経営に専念している (下)轡田紗世さんの明るい人柄で店内はいつも賑やか

轡田芳範さん  
紗世さん

もちもちになったことだ。水だけでこんなにも変わるのかと驚いた。東川に来たときに、二人で決めたことがある。それは、ランチ営業はしないということ。札幌の店では、たくさんの方が来てくれたが、お昼時は慌ただしく、お茶を楽しんでもらう余裕もなかった。「武夷岩茶は、お湯を注げば何煎も飲めるお茶。お客さまに、一煎一煎の色や香りの変化を、時間をかけて味わっていただきたいので

す」と奥泉さんは話す。お昼時に店を閉めるなんて無謀だと同業者にも驚かれる。でも儲けを求めているわけではない。ここへ来たなら、窓の外の旭岳を眺めながらのんびりお茶を飲んで、いくらでもゆっくりしてほしいだけと二人は口をそろえる。「お客さまも私たちも互いにゆったりと楽しい時間が過ごせたら、それが私たちの理想のお店なんです」

(2020年11月13日取材)

4 むかごのおかゆと水餃子のセット。おかゆは季節ごとにアレンジしたメニューも用意 5 調理する斎藤さんと奥泉さん。家庭料理カフェが農業に専念するため閉店し、この建物を受け継いだ



(上)水田に囲まれたヨシノリコーヒー。客席を増やすスペースをつくるため、改修工事中 (中)木のぬくもりを活かし、店内は落ち着いた雰囲気 (下)二人三脚でコーヒーショップを営む響田夫妻

## 水のミネラルバランスがうちのコーヒーに合っています。

らしく、「売り」の看板が何度も下りては上がる。それを見るうちに店を実現したい思いがどんどん強くなり、3年ほどかけてようやくここを手に入れた。

農家の納屋だった建物をリノベーションし、2015年春に自宅兼店舗が完成。当時、芳範さんは会社員だったので、妻の紗世さんが店の運営をすべて任された。

「生後5カ月の娘を抱え、心の準備もないままで、直前まで『私には無理』って泣いていました」と、紗世さんは笑いながら振り返る。

「ヨシノリコーヒー」が提供するの、芳範さん自身が目利きした貴重な豆を使ったスペシャルティ

コーヒー。その風味を引き立てているのが、東川の地下水だ。「ミネラルのバランスがうちのコーヒーに合っていて、味がまろやかになるんです」と紗世さん。店のコーヒーの味を再現したいからと、豆と一緒に水を求めていく客も多いという。この秋に札幌で開催されたコーヒーイベントでも、水を変えてコーヒーの飲み比べをしたところ、日本のトップバリスタやコーヒー専門家が皆、東川の水を絶賛したそう。

移住希望者への説明会に、アド



メンテナンスも定期的が必要で、年間でお金はそれなりにかかります」と正直に話している。マイナス面もきちんと伝えたいので、東川のすばらしさを理解して移住してきてほしいからだ。

数年前、北海道全域が停電した時には、地域の人たちが「お店の冷蔵庫が使えなくて大変だろう」と、自家発電のある公民館の冷蔵

バイザーとして参加することも多い紗世さん。東川は水道代が無料という点ばかり注目されるが、「ミネラルが固着するので、水回りは汚れやすいし、浄化槽のメンテナン

庫を使うように言ってくれた。ごく自然に助け合うコミュニティの姿を見て、幸せな環境にいたい。をありがたく実感したという。

夏の観光シーズンには、1日に200人もの来客がある「ヨシノリコーヒー」。開店から5年超が経ち、地域にもすっかりなじんできた。

「近所の農家のおじいちゃん、採れたてのトマトを都会から来たお客さんに配って、そこで話が盛り上がることもあるんですよ。田んぼのなかの小さなコーヒーショップが、たくさんの方たちの縁をつなぐ憩いの場所となっている。

(2020年11月13日取材)

# 楽しみ

## 雄大で美しい 風景が決め手

### 3

移住者の  
実像

どこで飲んだ水よりも  
間違いなくおいしいです。

小林 淳さん  
郁子さん

奈良県橿原市から2018年（平成30）に移住してきた小林淳さん（すなお）、郁子さん夫妻は東川の水と米に魅入られている。

「どこで飲んだ水より間違いなくおいしいし、近所の農家さんの『ななつぼし』は他の産地の同品種と比べても上質だと思います」と淳さんは言う。

「お米とお水がいいから、たいしたおかずがなくても充分。今日のお昼もおにぎりだけでした」と郁子さん。水道管を通る水と違い地下水は年中一定の水温なので、夏はひんやり、冬はぬるく感じるのもうれしいという。淳さんは「塩素消毒しない地下水を流すとバクテリアが死なず、ある種の成分が浄化槽にへばりつくのは新たな発

見でした。でもそれは点検業者が除去してくれるので、別に面倒はありません」と語る。

長男が暮らす旭川で退職後の人生を送ろうと市内で土地を探したが、あまりピンとこなかった。大阪ドームで開催された北海道の移住フェアに行くと、旭川市の隣のブースが東川町。

「そんな町、まったく知らなかった」と淳さん。説明を聞けば、ふるさと納税（ひがしかわ株主制度）の特典で無料宿泊できるといので試してみた。

淳さんが「空港から来ると道の両側に水を張った田んぼが広がり、正面にキトウシ山、右手に旭岳がそびえて」と言うと、「天気がいい日だったので大雪山連峰がすごく



奈良県から移り住んだ小林淳さん（左）と郁子さん（右）

# 楽しみ



きれいに見えたんです。もうここ  
しかない、という話になったのよ  
ね？」と郁子さん。互いにならず  
き合う。

野菜は畑で自給自足。近所の農  
家の方が来てアドバイスしてくれる。  
「それも朝6時くらいに」と郁子  
さんは笑う。「びっくりしたのは、

日の出の早い北海道の農家さんて  
初夏は3時には起きて、ひと仕事  
した後なんです」。ガラス張りの  
運転席にエアコンとステレオが付  
いたコンバインによる収穫作業を  
窓から夫婦で見て「時速30kmは出  
ています。大きな田んぼ1枚に20  
分分からない！」と最先端の農業



に感嘆したこともある。

小林さん宅は旭川市内にもっと  
も近い西端部。大病院も利用しや  
すい。今は長男が同居し、旭川へ  
通勤している。かつてニセコ町の  
高校で寮生活をしていた東京在住  
の次男に「北海道の冬を甘く見る  
な」と釘を刺されたが、東川は二

セコほど雪深くはない。

今は人生初の薪割りに夫婦で精  
を出す。淳さんが「関西から友人  
を招いたとき、北国らしくてカッ  
コがつくじゃないですか」と設置  
した薪ストーブで体の芯から温ま  
り、快適に東川の春を待っている。

(2020年11月18日取材)



(上)リビングにある薪ストーブ。夜に火を落としても朝まで家全体が暖かい (中)当初は旭川市に住むつもりだった小林夫妻。薪ストーブの前に話が弾む (下)薪ストーブで暖をとるには大量の薪が必要なので、薪割りは淳さんの日課となっている

中心市街の分譲地「グリーンヴ  
イレッジ」。150坪の土地に家  
を建てた舟越健造さん、里奈さん  
夫妻は札幌と旭川に実家がある。  
結婚した翌年の2016年(平  
成28)に移住してきた。健造さん  
は薬剤師、里奈さんは看護師(現

在は育児休暇中)でとも  
に旭川へ通う。  
「東川はよい町だと  
聞いていて、グリー  
ンヴィレッジは緑豊  
かな街並みがきれい  
だし、子育て支援も

# 「楽しみが近い」町で子育て

舟越健造さん

里奈さん

水を豊富に使えるのも魅力です。



「東川風住宅設計指針」に基づいて舟越夫妻が建てた家

手厚いので、ここで新生活を始め  
ることにしました」

東川町には景観条例があり、町  
の宅地造成地に家を建てる際は協  
定を結ぶ。勾配屋根、落ち着いた  
色調、植栽、低い塀など、舟越夫  
妻は、みんなで守る景観のしぼり  
をむしろ好ましく思った。

「建ぺい率40%以下で庭をつくる  
のですが、協定を結べば緑地化に  
助成がきますし、町内の業者さ  
んにガレージや家具などを発注し  
ても同様です。隣家と2m離すと  
か三角屋根などの条件は、まった  
く不自由ないことでした」と里奈  
さん。1歳2カ月のみらちゃんを  
連れて里奈さんは子育て支援セン  
ターや育児サロンなどに通う。

「お母さん方とおしゃべりしたり、  
福祉専門学校の保育科の学生さん  
が子どもたちと遊んでくれます。  
せんとぴゅあⅡの図書館では絵本  
の読み聞かせもあるんです。支援  
センターにはいろんな国の人の子  
どもが来ているし、町なかで外国  
人に会うのは珍しくなく、子ども  
にも刺激的だと思えます」  
一人で子育てをするストレスと  
は無縁のようだ。

また、車で旭川市内まで30分、  
旭川空港へ10分という地の利も魅  
力だ。「通勤は渋滞もなく快適です

し、東京へは札幌か  
ら行くよりも格段に  
近いので、冬は遊び  
に行くのが楽しみで  
す」と健造さん。里  
奈さんも「コロナ禍  
がなければ、夫の職  
場が切り替わる時期  
があったので育休中  
に東京とハワイに1  
カ月くらいずつ住も  
うか？」と話してま  
した」と言う。

かの有名な旭山動  
物園へもたったの15  
分。年間バスを使い「今日は  
カバさん見に行こうね」などと気  
軽に出かけられるのがうれしいと  
いう。大人にも子どもにも「楽し  
みが近い」町だ。  
住んでみて少し困ったのは、6  
月に近くのポプラ並木の綿毛が飛  
散して外に洗濯物を干せないこと  
くらい。

「おいしくて安全な水を豊富に使  
えるのも素敵。無駄遣いしないよ  
うに注意していますが、水道代が  
かからないのはうれしいです」と  
里奈さん。広い敷地に構えた「東  
川風住宅」で子育てライフを満喫  
している。

(2020年11月19日取材)

(右)庭側から眺めた「グリーンヴィレッジ」の街並み  
(左)舟越健造さんと長女・みらちゃんを抱っこする  
里奈さん。子どものケアが手厚い東川の暮らしに満  
足している





# 大自然のなかでのびのびと

大塚友記憲<sup>ゆきのり</sup>さんと祐子さんは、  
ここ東川町で出会い、2014年  
(平成26)に結婚した。

友記憲さんは2000年(平成  
12)に北海道の大自然に憧れて旭  
岳温泉の宿、大雪山白樺荘に住み

込みで勤務した。20歳だった。

「海外旅行に出ではまた働かせて  
もらうのを2〜3回繰り返し8〜

9年お世話になりました。その間、  
動植物や山の写真を撮るようにな  
り、写真を仕事にしようと千葉県

野田市の実家から1年間、渋谷の  
写真学校に通いましたが、どうに  
も自然が恋しく、また東川へ。観  
光協会の臨時職員として採用され、  
そこで妻に出会いました」

神奈川県横須賀市が実家の祐子

さんは不動産会社で10年間、IT  
関連の仕事をしていた。やはり写  
真が趣味だった。

「旭川空港を拠点に道北を回り、  
美瑛や富良野の風景が好きでした。  
そのうち、すばらしい景色を残す  
自然保護の仕事をしたと思うよ

うになり、東川町の委託事業の  
(旭岳自然保護監視員)に応募し  
転職しました。半年の期間雇用で





3

たくましい自然児になりつつあります。

大塚友記憲さん  
祐子さん



4

1,2 自然のなかで遊ぶ大塚さんご夫妻の子どもたち。都会では得がたい体験を日々積み重ねている 3 夕日が照らす美しい水田のなかをサイクリング。奥に見えるのは大雪山連峰で、右端のピークが道内最高峰の旭岳(標高2291m) 4 大塚友記憲さん(左)、祐子さん(右)ご家族。2018年7月にオープンした東川町の複合交流施設「せんとびゅあⅡ」の図書室にて 写真1,2,3 提供: 大塚友記憲さん

したが、ちょうど旭岳ビジターセンターの欠員が出て、それが観光協会の仕事です。『半年で帰ってくるなんて言ってたけど、そんなはずないと思ってた』と親には見透かされてました」

観光協会の仕事を始めた2010年(平成22)ごろから若い移住者が増え、同世代の友人が多くなってきたことが心強い。

山岳ガイドなどの資格をもつ友記憲さんは町の臨時職員としてビジターセンターに勤務しつつ写真家の仕事もする。宅建士の資格をもつ祐子さんは旭川市の不動産仲介業者と契約して活躍中だ。

保育園の年中組と2歳の姉弟は「自然豊かな環境のおかげで、たくましい自然児に育ちつつあります」と友記憲さんは言い、「子ども

たちが朝起きて畑に行きトマトをもうで食べる、みたいな生活が理想でした。それができているのがうれしい」と祐子さんも満足そう。

ある日、家の前に大きな袋が置いてあった。トウモロコシが20本、心当たりの知り合いに電話したが、誰かわからない。数日後、「あのトウキビ、うまかった?」と声をかけられた。あ、おじいちゃんだっ

「たんだ!」ありがとうございます」とお礼が言えた。「よそ者扱いされたいことはありません。とてもよくしてくれまます」と祐子さん。

老いも若きも持ちつつ持たれつつ、同じまちに暮らす者として分け隔てしない。そんな東川流の暮らし方が二人をこの地に自然と引き寄せたのかもしれない。

(2020年11月20日取材)

自然

# 6 五感を潤す水の景色に惹かれて

「週末に写真を撮るこ  
とだけが生きがいで、  
長野からワンボックス  
カーで3カ月かけて北  
海道へ。そのうちお金  
がなくなり、写真館に雇われて1  
996年に上富良野町に移住しま  
した」

飯塚達央さん

飯塚達央さんはフリーランスに  
なった2年  
後に美瑛町  
へ。結婚し  
子どもが生  
まれ、隣の  
東川町に転  
居したのが

## 住みつづけた 町に初めて 出合えました。

2005年(平成17)。東川町国際  
写真フェスティバルに出展したこ  
とがあるなど、東川とはかわり  
があった。2011年(平成23)、  
縁あって旭川市内に写真スタジオ  
を構えた。「東川を素通りして出勤  
していました。『写真の町』にいる  
のに変だなと店じまいして、現在  
地に自宅と家族写真のスタジオを  
建てたのが2015年です」  
大阪から静岡、沼津、松本、富  
良野、美瑛と転居を繰り返した飯



写真家として活躍しながら東川町議会議員としても活動する飯塚達央さん

塚さんが東川に腰を落ち着けたの  
は、田舎町にありがちな閉鎖的な  
雰囲気があったくないこと。  
「これは僕の主観ですが、水の豊  
かな稲作地帯で暮らしてきた農家  
の方々が多く、気持ちがとおらか  
だからではないでしょうか」  
至るところを走るのが、田に水  
を引く水路。五感を潤す水の景色  
にも飯塚さんは惹かれていた。  
「5月の田植えから8月いっぱい  
まで常に水が滔々と流れています。  
その時季になるとマイナスイオン  
みたいなのを感じるんです」  
飯塚さんは東川町議会議員でも  
ある。「ずっと住みつづけた町

に初めて出会えたので、まちづく  
りにかかわりたい」と2019年  
の町議選に立候補。当選した定数  
12人のうち、飯塚さんを含め移住  
者が4人を占めたのは初めてとい  
う。68%の投票率は、市区町村議  
会議員選挙の全国平均投票率(総  
務省2015年調査)47%に比べて格  
段に高い。

任務の一つは前年度決算の承認  
だが、「8000人規模の町でも膨  
大な予算・決算書と付随資料があ  
り、とても細部までは精査しきれ  
ない」と明かす。「議員の大事な役  
目は行政の監視です。もちろんそ  
のつもりで疑問点は質  
しますが、町長はじめ  
職員の方々がまちを  
よくしたい一心で仕事  
をしていることは町議  
になってよくわかった  
ので、基本的には信頼  
しています」  
飯塚さんが選挙で訴  
えかけたのは、行政と  
議会が何が行なわれて  
いるか伝える役割を果  
たすこと。

「議員として見知った情報をSN  
Sで発信しています。行政に対す  
る関心を高めてもらうことがま  
ちづくりに欠かせないと思ったか  
らです」

東川町では優秀な職員が率先し  
て物事を進めるので、町民が行政に  
委ねがちになるきらいがある、と飯  
塚さんは感じていたが、最近では町民  
主導のイベントなどが増え、望まし  
い兆しが見える。官も民も閉塞感  
を抱える地域が多いなか、実にせい  
たくな悩みというほかない。

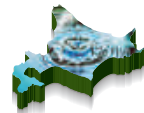
(2020年11月19日取材)



【移住者の実像】

あまり遠くない過去に東川町へ移住  
した人たちには、いくつかのパターンが  
あるようだ。明確に水を求めてやってき  
た人、偶然が引き寄せた出会いから移  
り住んだ人、子育て環境や通勤などの  
暮らしやすさを重視した人、ある種の  
自分探しを終えて「ここだ」と決めた人。  
経緯も年齢もさまざまだが、東川町の  
水、その水を育む大雪山や水田、旭川  
空港に近い地の利などに満足している  
ことがわかる。

次ページからは、こうした移住者を  
呼び寄せるきっかけを生んだ東川町の  
まちづくり施策について見ていきたい。



【写真文化首都】

# 今日の東川町をつくった 「写真の町」宣言



東川町のまちづくりでターニングポイントとなったのは「写真の町」宣言。「一村一品運動」を東川流に取り入れ、新たな文化を醸成しようとしたことから、写真を撮りに来る人たちに恥ずかしくない地域にしようと、のちの木彫看板、景観条例、東川風住宅設計指針などへつながっていく。



写真提供：東川町

## 前例のない 文化によるまちおこし

開拓90周年を迎えた1985年（昭和60）6月1日、東川町は「写真の町」宣言を行なった。高名な写真家を輩出したわけでも、写真関連の企業があるわけでもない、小さな北の町のユニークな挑戦の始まりだった。

当時、東川町は観光客数の減少に頭を悩ませていた。そのために発案されたのが「写真の町」だった。雄大な自然や田園が広がる東川の美しい風景と写真を組み合わせ、町の魅力として打ち出していこうというアプローチだ。ちょうど大分県から始まった一村一品運動が全国で盛んになっていた時期だが、モノや産業ではなく、文化によるまちおこしという発想はほかに例がない斬新なものだった。「写真の町」事業の中核となるのが、「東川賞」。学芸員やギャラリストなど専門家によってノミネートされた国内外の写真家の作品を審査し、毎年夏に開催される「東川町国際写真フェスティバル」（通称「フォトフェスタ」）で表彰する。初めは、1、2年で失敗して終わるだろうという懐疑的な声も多かった。



たが、担当職員が各所へPRに回し、各界の著名な文化人を審査員に迎えるなどの努力を重ねて徐々に認知度が上がり、全国から多くの人が集まるようになった。

ただし、行政主導でイベントが盛大に行なわれても、町の人たちにはどこか他人事ではしかなかった。そんな町民の意識を変えるきっかけとなったのが、1994年（平成6）に始まった全国高等学校写真選手権大会「写真甲子園」だ。

## 町民の意識を変えた 高校生との交流

「写真甲子園」には、学校ごとに生徒3人1チームで参加する。初

戦は6〜8枚の組み写真を提出し、初戦審査会を通過すると全国のブロック審査会へ進む。ここで選手たちがプレゼンテーションして、審査で勝ち残った18校が東川に足を運び本戦を戦い、全国一を目指す。近年では毎年500校以上の応募がある。「写真甲子園」は写真に取り組みむ高校生にとってあこがれの舞台となっている。

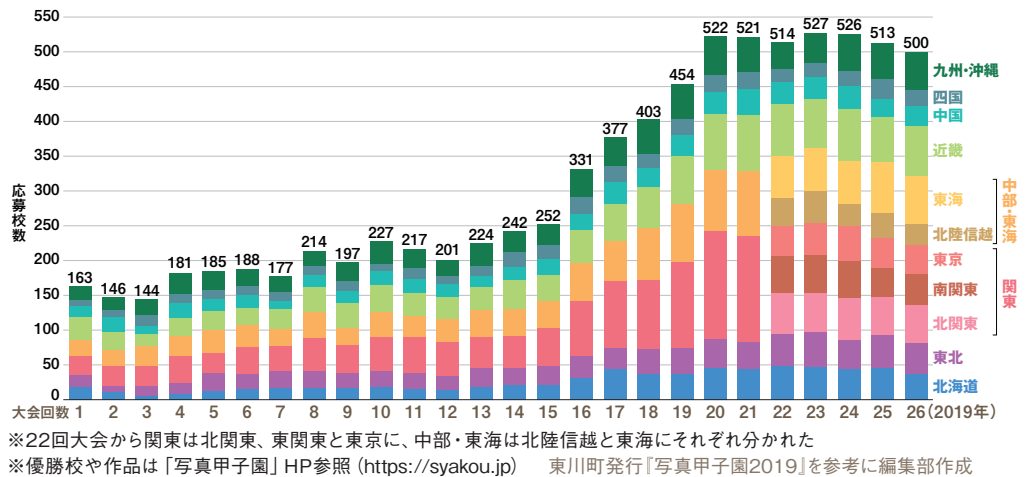
東川での本戦は、厳格なルールのもと3日間撮影して行なわれる。町外を含む撮影地やテーマは直前まで非公開。当日は専用バスが巡回し、毎日定時までに撮影したデータを本部に提出。バスに乗り遅れたら徒歩で移動し、データ提出が1分遅れるごとに減点される。

写真のセレクトは生徒のみで行ない、その日の終わりに審査委員の前でプレゼンテーションし、最終日に優勝校が決まる。

選手の高校生たちは、オリエンテーションを含め6泊7日を東川で過ごし、その間は町民のボランティアが食事の用意などを手伝う。また本戦では生徒らは町に出て、地域に暮らす人に話しかけ、時にはカメラを向ける。そんな交流を通して、町の人たちは「写真の町」事業を自分たちのこととしてとらえ、積極的にイベント運営にも協力するようになっていった。大会期間中のホームステイ体験は、「高校生にもっと東川を楽しんでほしい」と町民が考えたプログラ

1 中川吉治町長（当時）が行なった「写真の町」宣言式 2 約1か月に及ぶ「東川町国際写真フェスティバル」ではさまざまなイベントが開かれる（写真は愛好家や大学生による「ストリートフォトギャラリー」） 3 企画写真展などを行なう「東川町文化ギャラリー」。1989年11月に開館して以来「写真の町」の中心施設で、2021年2月にリニューアルオープン

## 「写真甲子園」初戦応募校数の推移



東川町は2014年(平成26)、写真文化の中心地として、新たに「写真文化首都」宣言をした。東

### 写真を通じて より豊かな生活へ

東川町文化ギャラリーで働く、写真の町課学芸員の吉里演子さんは、実は2005年(平成17)の「写真甲子園」に大阪から出場した元選手である。大会でふれあった東川の人と町に魅了され、翌年に大阪の大学に進学すると、今度はボランティアとして「写真甲子園」に参加した。

「裏方にまわって、たくさんの方が真剣に大会を運営する姿に感動して、自分もその一員になりたいと思いました」。以来、何度も東川に通いつめたという吉里さん。臨時職員の口を紹介してもらい、働きながら専門学校に通って採用試験を受け、晴れて東川町の職員となった。現在、「写真の町」事業にかかわるさまざまな業務を担当している。



川の地で写真と世界の人々を繋ぐことを目的に掲げ、2015年には写真甲子園の海外版といえる「高校生国際交流写真フェスティバル」もスタートした。

写真関連のこうしたイベントは、フォトフェスタ期間中に集中して行なわれるため、毎年7月末から8月初旬にかけて、東川の町は写真一色になり大変な賑わいを見せる。「ありがたいことに、全国から写真をきっかけに東川を訪ねてくれる観光客も増えました。でも、イベントだけが写真の町事業ではありません。写真を通じて町民の皆さんの生活がより豊かになることが何より大事だと思います」と吉里さん。

そのために、町では通年、就学前の幼稚園児からシニアまで多様

な層に向けて、各種ワークショップを実施。また、現在改修中(2021年2月リニューアルオープン)の東川町文化ギャラリーには、新たにラウンジと呼ばれるスペースを設け、町内の家具職人がつくった東川家具などを置き、写真展を見に来た人でなくても自由にくつろぎ交流できる場にする。

吉里さんが特に力を入れているのが、2013年(平成25)に自ら立ち上げた携わった「ひがしかわ写真少年団」。現在、小学校3年生から中学校3年生まで町内の子ども25名が参加し、月2回、写真に親しむ活動をしている。

「東川の子どもたちに、故郷が写真の町であることを誇りに思い、写真と楽しくふれあいながら成長していったほしいのです。いつの日か、ここから東川賞を受賞する写真家が誕生することを夢見ています」

行政や市民といった枠組みを超えた、東川を愛する人々の熱い努力により、「写真」を中心としたこの町ならではの文化が着実に育まれている。

(2020年11月13日取材)



【写真文化首都】

写真1 2 3 5 6 提供：東川町

4東川町 写真の町課 東川町文化ギャラリー 学芸員の吉里演子さん。高校生のとき「写真甲子園」に出場した経験をもつ 5ホストファミリー宅に到着した「写真甲子園」の出場者たち。ホームステイは町民が発案したもの 62015年にスタートした「高校生国際交流写真フェスティバル」。海外選抜校20校(各国・地域1校ずつ)と日本選抜校2校が参加



【街並み・移住】

# みんなできつくる街並み

## と移住促進策

2005年（平成17）3月、景観法に基  
づく景観行政団体となった東川町は、  
景観や環境に配慮した「東川風住  
宅」の建築を奨励している。自然景  
観と田畑や住宅などの文化景観を  
守り育てるため、「東川風住宅設計指  
針」を設定し、新築、建て替え、庭  
づくりでの活用を促している。また、  
2020年に実施した移住体験には  
定員を上回る応募があったという。  
東川町の住まいと移住促進策とは？

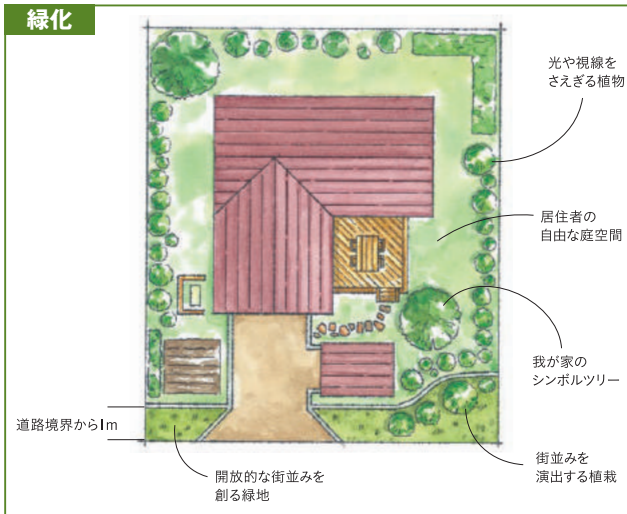
——「東川風住宅設計指針」に基  
づいた第1号宅地が、2006年  
（平成18）に分譲開始した「グリー  
ンヴィレッジ東川」ですね。

東川町と施主さんが景観緑化協  
定を結んでいます。遠景の大雪山  
系と調和する勾配をもった屋根。  
豊富な森林資源と木工業の町なら  
ではの木材の利用。瓦をイメージ  
させる重厚な屋根の色。派手さを  
抑え暖かみのある外壁の色。囲い  
は原則として設置しないか高さ制  
限を守り開放的な住宅景観にする、  
といった規定です。ゆったりした  
敷地に広い庭と植栽の緑が映える  
すばらしい景色の住宅街になりま  
した。以後の東川町土地開発公社  
の宅地造成でも、原則としてこの  
指針に基づいています。

——東川町による宅地造成は、こ  
れからも増えるのですか。

——毎年30区画前後ずつ、こちんま  
りと売っています。ありがたいこ  
とに最近では需要が多いので、手広  
く宅地造成すれば多くの方に移住  
していただけますが、それをする  
と子育て世代が一気に増え、子ど  
もたちが巣立った30〜40年後には  
高齢化が加速し、人口バランスが  
崩れてしまいます。無理して人口

## 緑化



東川町は「大雪の山並みと調和する住まいづくり」を目指し、敷地内の緑化や建物の外観、住宅周りなどに細かな指針を設けている 資料提供：東川町

各戸の敷地が広く、要所に遊歩道を整備しているの  
で開放感がある「グリーンヴィレッジ東川」の街並み



「グリーンヴィレッジ東川」の街並み(写真は第三期造成中のもの) 提供：東川町

を増やさず8000人規模を堅持するのが今後の課題です。今は空き家が少なく、中古物件ご希望の方が待機中ですが、そのうち必ず増えてくるでしょう。それを見越して、まだ無登録ですが空き家バンクのしくみはつくっています。家財道具などを整理しておけばご遺族が家を賃貸・売買しやすい、とお勧めしたわかりやすい終活マンガも配布しました。

### コロナ禍の体験施策で移住者が誕生

——2020年に移住体験の施策を実施したそうですね。

6月に東京の緊急事態宣言が解除されたタイミング

を見計らい、4泊5

日で東川町の生活環

境を知る「移住体験

ツアー」と、3カ月

以上1年以下の条件

でお試し居住する

「移住体験会」の2



東川町 税務定住課 課長の  
吉原敬晴さん

件を募集しました。ツアーは6組の定員に対し23組の応募があったので、町長と協議し、補正予算を組んで23組すべて受け入れました。ただし、コロナ禍もあるので7月から11月まで6回に分けて実施しました。7月に参加された札幌の方はすでに移住され、アパートに仮住まいして、ご希望の空き家を探されています。東川の充実した子育て環境に惹かれて、お仕事はリモート主体でされるそうです。

### 移住体験会の方は？

「東川暮らし体験館」に仮住まいする8世帯を募集したところ、11世帯の応募があったので抽選で入居者を決めました。沖縄のご家族が「東川を気に入ったので定住し

ます」と12月にアパートに移り住み、戸建て物件を探されています。

——アパートは多いのですか。

民間で450世帯分ほど、公営住宅も400世帯強は受け入れるキャパシティがあります。ただし、民間アパートも稼働率が98%なので、家賃5万円前後の人気物件はなかなか空きが生まれません。

——お試し居住のしくみは、これまでなかったのですか。

2世帯だけ入れる施設「大雪遊水ハウス」がありますが、最長2カ月でした。なので今回の施策で、短期(4泊5日)、中期(2カ月)、長期(3カ月以上1年以下)の三段階になったわけです。長期の拠点、東川暮らし体験館は、北海道警察の官舎を町が取得したもので、部屋には最低限の電化設備、ベッド、食器類を備えていますから、ハードル低くお試し居住ができます。

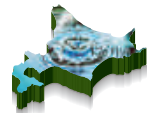
——移住者は戸建てだと、どんな物件の希望が多いのでしょうか。

農家宅地の需要が高いです。田んぼのなかの一軒家ですね。そんな環境でのびのびと子育てしたい。と。虫などとも一緒に住むのが平気なら、満々と水を張った水田に囲まれるのは、もつとも東川らしい暮らし方かもしれません。

(2020年11月20日取材)



【街並み・移住】



【地元民】

考えつつづける

# 「東川らしさ」が

# 未来をつくる

東川町の商業は、旭川市に隣接した都市近郊型として、家族経営を主とした小規模店が多い。東川町で生まれ育ち、家業を継いで商売を営む人たちは今の状況をどのように考えているのか。1986年（昭和61）の木彫看板設置事業を端緒に「木彫看板すとりーと」をつくってきた商工会の先輩と現役の青年部員に話を聞いた。

## スローライフで 店が成り立つ町

曾祖父の代から豆腐店を営んでいる宮崎伸二さんは、東川町商工会青年部員でもある。

「お祭りなどのイベントを手伝ったり、町のためのボランティア活

動が主体です。コロナ禍では、テイクアウトできる飲食店をピックアップして、いち早く町内にチラシを撒きました。それが波及し、町も力を貸してください、出前システムにまで発展したのが、最近の大きな出来事です」

2020年（令和2）4月から町役場では、事業主や個人の「少し

だけ手伝ってほしい」要望と住民

の「少しだけ働きたい」要望をつ

なぐ「しごとコンビニ」のしくみを

始めた。パートやアルバイトの

雇用契約ではなく、案件ごとの業

務委託契約で自分の都合に合わせて

登録した東川町民が働く。商工会

青年部のテイクアウトのチラシを

きっかけに町が動き、このしくみを

活用して出前に対応——速やかな

な官民コラボに東川らしさの一端

が窺える。

青年部員は賛助も含めて16名。

移住者も加盟しているが、地元の

商工業者の後継ぎが8割という。

ちなみに伸二さんは、兄と父を相

次いで亡くし5年前に知的障がい

者施設の仕事を辞めて家業に入っ

た。考案した豆乳ソフトクリーム



東川町の中心市街地にある店舗に掲げられた木彫看板。町内のクラフトマンの手によるもの

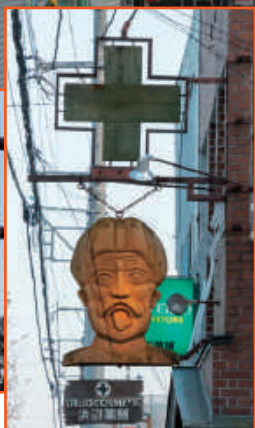


1豆腐づくりに欠かせない東川町の地下水。しかし宮崎さんは「ずっとこの水で育ってきたので」と特別意識はしていない。よそ者にはうらやましい財産だ 2「豆乳ソフトクリーム」で行列ができる「宮崎豆腐店」 3 四代目の宮崎伸二さん

3 2

1





などの新商品が観光客にも人気だ。青年部として目下の課題は「OBも賛助部員として手伝ってくれますが、45歳定年制なので新部員の獲得が重要」と話す。

そのためには、東川町へ移住して起業する人たちに期待したい。「町内のイベントでは協力し合っていますし、私より少し下の世代は移住者と地元民と一緒に独自のイベントも行なっていますよ」

東川町の飲食店は不定休の店が目立つ。仕事は楽しく生きるための手段と考え、趣味などを犠牲にしない。そんなスローライフで商売している人が結構多いようだ。「そこが東川らしさかもしれないません」と言う宮崎さん。スローライフの店が増え、休業日が各々ずれば利用客も不便を感じない。「東川町に移住して起業する方は今も増えています。これをきつ

けに、多くのお客さまを取り込み、事業を継続していきたいです」

### 「東川らしさ」を熱く語り合うのが東川らしさ

中心市街地の商店には木彫看板を掲げている店が多い。木工芸が盛んな東川らしさのシンボルの一つといえる。この設置事業を進めたのは約35年前の東川町商工会青年部。創業60年を超える洋菓子店「>月庵」<sup>てんげつあん</sup> 二代目の高島郁宏さんは当時、部員として携わった。

「始まったばかりの『写真の町』事業に合わせ、写真映りのよいまちにしようと、僕らの先輩がヨーロッパの視察旅行で見た鉄の突き出し看板から発想しましたが、最初は自分たちで彫ったのですが、素人だから当然うまくいきません。ふと気づけば、東川にはクラフト

マンがたくさんいます。専門家の力を借りたら、自ずと新たなつながりも生まれてきたんです」

仕事を終えて仲間が集まり言いたいことを言い合いながら、町の未来に思いを馳せる。高島さんはそんな時間を大切にしてきた。

「東川らしさってなんだろう。それを考えつづけてきました。いつも見守ってくれる大雪山の旭岳、

そこから流れてくる地下水など自然の恵みではないか、と言う人もいれば、空港や旭川に近い地の利ではないか、と言う人もいます。

立場や職業でそれぞれ違う。答えは出なくても、そういうことを熱く語り合うのが一番大切ではないかという気がしています」

高島さんは高校を卒業し28歳までケーキ職人の見習いのため、東川を離れていた。帰ってきて商工会青年部の活動を始めたとき、先輩が親身になって話を聞いてくれたことを今でも忘れない。この町の人は移住者にも同じようにやさしく広い度量で接するのだろうか。新参者も10年ほど経てば歳を重ねてすっかり地元の人になる。

「そうやって世代がつながり価値観を共有し、うまく回っていくと、いつまでも元気な町でいられるのでは」と高島さんは考えている。

(2020年11月19日、21日取材)



【地元民】

4「>月庵」の高島郁宏さん 5東川町米を使った「米粉のシフォンケーキ」。洋菓子店ならではの「東川らしさ」を代表する逸品 提供:>月庵 6若い従業員を指導する高島さん



# 町民の幸福感を増す「イベント」



東川町はイベントが多い。2019年以前は、春から夏にかけて毎週のように町のどこかでイベントが開かれた。町民自ら企画したものも少なくない。講師の交通宿泊費、謝礼などに使える補助金（上限100万円）が利用できることも後押しする。自身もイベントを手がける東川町東川スタイル課の菊地伸さんに話を聞いた。

## まちを自慢したい住民が自ら仕掛ける

——最近の東川町では多彩なイベントが盛んだと聞いています。

目下はコロナ禍で中止が目立ちますが、町主催のみならず、民間団体の主導、移住者コミュニティの企画など、たぶん周辺のまちに比べてたら極端に多いです。

——なぜそんなに増えたのですか。

一つには補助金制度の充実があります。人づくり地域づくり支援事業補助金のほか、3年前から企業版ふるさと納税を財源に「チャレンジ補助金」を運用しています。東京都足立区にある土木専門工事関連の会社が東川町の取り組みに共感され多額の支援をいただくなかから、町民活動の活性化のために創設した補助金です。

——それにしてもイベントをやりたい方が多いのはどうして？

移住者は「環境を活かしてどう楽しむか」に熱心です。デザイナーやスノーボーダーなど専門スキルの高い方も多い。例えば移住者コミュニティが提案し、元からいる人たちも混じり合い、企画が始まったりします。東川町の生まれ育ちではない人を移住者と定義すれば、過去25年で人口の5割が移住者となりました。農地転用の宅地造成が始まった当時は、農業散布や町内会運営などを巡って新旧住民に軋轢が生じ、初めからうまくいったわけではありませんが。

——時間が解決したのですか。

移住・定住の促進はあくまで手段の一つに過ぎず、施策の目的は一貫して「町民を幸せにする」こ



東川町 東川スタイル課  
課長の菊地 伸さん



1 2 2日間にわたるコンサートやダンスパフォーマンス、キッズステージなどで盛り上がる「ひがしかわどんどい祭り」 3 旭川近郊のアマチュアバンドが集まる野外フェス「羽衣音楽祭」。住民のサポートクラブが活動するきっかけとなった  
(写真はいずれも2019年以前のもの) 提供：東川町

とです。手前味噌ですが住民の役場に対する信頼感ほかの町より高いはず。幸せづくりに懸命な役場が間に入って障壁を一つずつ乗り越え、町民としての立場を共有できるようになり、ようやくそれが実を結んできました。人口を維持し店舗が増えて外部からも注目されています。「東川に住んでいる人ってまちを自慢したがるよね」は来訪者からよく聞く言葉です。

### 地元のイベントを 住民団体がサポート

——菊地さんはロックバンドでドラムをたたいているとか？

高校時代から始めて中断していましたが、役場に入って4〜5年目に町内の仲間とバンドを結成しました。音響の人とも知り合い、意気投合して、最初は町民文化祭の音響や照明のサポートをしたんです。それがすごく喜ばれて。民間団体にすると宝くじが原資の補助金で音響や照明の機材を買えたので「東川イベントサポートクラブ」を立ち上げ、同時期に旭川近郊のアマチュアバンドの野外フェス「羽衣音楽祭」も始めました。以後、機材の必要な町内のイベントにはことごとく僕らがかかわっ

ています。業者に依頼すると多額の費用が発生しますが、僕らなら機材の損料（償却費や維持修理費）1万円程度で済みますから。

——それはあくまでも民間団体としての個人的な活動ですよ？

そうですね。ただし、ここからが役場の絡んでくる話なのですが、次第に職員としてイベントの企画段階から相談に乗ったり、町の補助金の案内などをするようになりました。ちなみに、僕らが始めた羽衣音楽祭についてはお金をかけないことがモットーなので、補助金はこれまで一度も受けたことがありません。

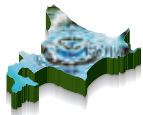
——イベントの隆盛も、まちを活気づけている要因でしょうか。

その一つかもしれません。あるシンクタンクが東川町を取材して分析し「呼び込み力の高い町」という結論を出していました。移住してきた人が、自ら情報発信して人を呼び込んでくる町は、よそにあまりないそうです。「何が一番の成功事例ですか、写真の町ですか子育て支援ですか？」とよく聞かれるのですが、一つには絞りきれません。幸せづくりの施策が組み合わせたり、振り返ってみると点と線が繋がっていたのです。

(2020年11月18日取材)



【イベント】



【農業】

# 耕作放棄地のない 道内有数の稲作地帯

東川町は稲作が盛んだ。一級河川・石狩川水系の忠別川と倉沼川が流れるなど水利に恵まれ、また泥炭地がない肥沃な土壌でもある。ミネラル豊富な大雪山連峰の雪解け水は冷たいが、要所に設けた遊水地で温めてから水田に引く。東川町農業協同組合のキャッチコピーは「みずとくらす<sup>®</sup>」。耕作放棄地がないという農業施策を探る。



東川町農業協同組合の代表理事を務める樽井功さん。1895年（明治28）に富山から東川町に入植した拓民の孫にあたる

## 水質汚染を防ぐ お湯の殺菌消毒

東川町は自然の恵みの地下水で暮らすまちだけに、農業でも水を守る意識が強い。

「ここは石狩川水系の源ですので、『下流で生活している人たちの水を汚してはいけない』という意識が昔から強く、農家は合併浄化槽を必ず備えています」

そう話すのは、東川町農業協同組合（以下、JAひがしかわ）代表理事組合長の樽井功さん。JAひがしかわは、2007年（平成19）、道内でもっとも早く水稲種籾の温湯殺

菌消毒施設を導入した。これは米の種子の全量を、薬剤ではなく60℃の湯で10分間殺菌消毒するもの。

「これで農薬の使用量を大幅に減らせるだけでなく、種子を消毒した後の廃液による水質汚染を防げるようになりました」と樽井さん。この施設には約4000万円かかったが、「先行投資ではありますが、長い間使えるものですからね」と意に介さない。

町外からの移住者たちは「東川のお米を東川の水で炊くとおいしい」と口をそろえて言う。そう伝えると樽井さんは大きくうなずいた。「私も以前、知り合いにお米だけ送ったことがあるんですが、東川の水

で炊いた時と味が違う、と言っていました。お酒も『大雪旭岳源水』で割るとまろやかになり、つい飲みすぎちゃいますよ」と笑う。「大雪旭岳源水」とは、JAひがしかわ、コープさっぽろ、東川町らが連携して2012年（平成24）に設立した株式会社大雪水資源保全センターでボトリングしているもの。大雪旭岳源水は地域団体登録商標で、近年、新しい生産ラインを導入し、念願の黒字転換を果たした。ペットボトルと東川米をセットにした「炊くだけ御膳<sup>ごぜん</sup>」は土産品として好評だ。

## 品質とブランド化で 遊休農地ゼロの町

JAひがしかわの米の耕作面積は約2200haで、生産農家は126戸。樽井さんが20代のころに比べて農家数は6分の1以下になったが、耕作放棄地はない。離農





春を迎えた東川町の水田と子どもたち 提供:大塚友記憲さん



ペットボトルの「大雪旭岳源水」と「東川米」の無洗米をセットにした「炊くだけ御膳」

によって農地が空いたとしても、すぐに町内から買い手や借り手が現れるからだ。水田の購入や借入を希望する若手の声を集めると、現状で約300ha足りないという。

その理由は、品質のよさとブランド化だ。

「かつて北海道の米は、猫も食わずにまたいで通る『猫またぎ米』などと揶揄されていましたが、上川農業試験場で品種改良を重ね、他府県に負けない品質の米となりました」と樽井さんは言う。

ブランド化による付加価値づくりでも先駆けた。独自の厳しい生産基準を設け、年に3回生産者の栽培履歴をチェックするなどの「東川米信頼の証10か条」の制定や東川米GAP基準（農業生産工程管理手法）の導入など、安全と品質を向上する取り組みが評価され、2012年（平成24）、「東川米」として地域団体商標に登録された。公式に「地域ブランド」と認められた北海道米の第一号だ。生協など独自に開拓した販路を通じて、東川ブランド米を産直取引する。清涼な水に育まれた良質な東川米は、北海道を中心に全国で取引されている。

目下、JAひがしかわは国営事業による水田の大区画化を進めている。1枚当たり30a程度だった水田を220aに集約しつつある。「順調にいけば2030年ごろには最大で約2800haとなるように展開しています。おそらく5」

6年の間に生産農家が100戸を切るでしょうが、この基盤整備が終われば十分に農地を守れるはず」と樽井さんは展望する。

### 設置投資とICTで 永続的な稲作を

大区画化だけでなく、JAひがしかわは将来を見据えた投資も行なっている。その一つが、米の乾燥調整施設の建設。刈り取った籾の水分を14・5〜15%にする乾燥工程は、今は農家が担うが、収穫時期は日中に稲刈り、夜に乾燥・すり作業と過重労働になっている。「水分を17%程度にした籾出荷してもらえば、後の工程は農協が

します。2024年をめどに、乾燥から精米まで一貫した施設をつくり、海外輸出にも対応できる配備にしたい」と樽井さんは明かす。品質の統一と安定が図れるとともに、農家の省力化とコスト削減になる。大規模化している水田で、収穫適期を逃さず稲刈りに注力できる。

米づくりは土地や設備投資に多額の費用を要するので、新規就農者は野菜などの施設園芸から始める。稲作は既存農家が大規模化でその将来を担うが、田植えと収穫は家族総出で支えてきたので、未



婚者が増えているのが気がかりだ。「未婚の後継者のために、農協が苗づくりや移植などを肩代わりする。そういった人的支援も今後は考えなければなりません」と樽井さんは未来も見据える。

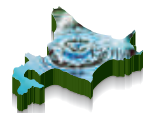
同時にGPSを活用した自動運転による田植えや肥料散布、ドローンを使った防除など、スマート農業による省力化も着々と進んでいる。東川の水と米のおいしさは色褪せず受け継がれるだろう。

（2021年1月12日/リモートインタビュー）

田植えが始まるまでの短い期間、無風の日にしか見られない東川町の絶景「鏡面水田」 提供:東川町



【農業】



【まちづくり】

# 水と人が巡るまち

## 町長に聞く「東川町が元気な理由」

東川町は、先にふれた「写真の町」以外にも、町内で生まれた赤ちゃんが生後100日を過ぎると、町内の家具職人による手づくりの椅子をプレゼントする「君の椅子」事業、小学校を移転・新築する際に敷地内に水田を1haつくり、農業体験としてコンバインに小学生を乗せるなど、よそではあまり聞いたことがない事業を多数行なっている。「合併せず自立する道を選んだからには、新しいことに挑戦しなければ」と言う町長の松岡市郎さんに話を聞いた。

### 「地下水で暮らす」希少価値を再発見

「開拓以来ずっと、われわれはこうして暮らしています」と、東川町長の松岡市郎さんは手押しポンプのしぐさをした。大雪山の雪解け水が長い歳月をかけて地中に染み込み、まちを巡って水田を潤し、生活用水となる。手押しポンプは電動ポンプに置き換わったが、地下水で暮らしていることは変わらな

実、町全域に上水道を敷設す

る議論も昭和の時代からあった。東川の南端を流れる石狩川水系の忠別川で多目的ダムの工事が進んでいるときに町民アンケートをとった。

「半数以上が『上水道は必要ない』と答え、『今は必要ない』も23%で、両方合わせると約8割が『今、上水道は不要』という結果になりました。水質検査でもまったく異常がない。あえて必要ないのでやめたのです」

この前後から東川町は地下水で暮らす希少価値を再発見し、広く訴求するようになった。2004

年（平成16）に水源を「大雪旭岳源水公園」として整備し、2008年（平成20）には環境省の「平成の名水百選」に。2009年（平成21）からは地下水を利用する全国の市町村に呼びかけ、持ち回りで「安全・安心でおいしい地下水サミット」を開催している。

「当たり前のように暮らしている」と、そのよさに気づかない最たるものが水と空気です。しかし、天から贈られた美しい結晶をもつ雪が『神々の遊ぶ庭（大雪山のアイヌ名、カムイミントラ）』に地下浸透した水で暮らす文化は、かけがえのないもの。大雪旭岳源水のカルシウムとマグネシウムの2対1の割合は、望ましい飲料水の硬度の比率にきわめて近いという研究者の指摘もあります」

東日本大震災は災害時の水の確保と供給の課題を浮き彫りにした。そこで2013年（平成25）に操業開始したのが、株式会社大雪水資



松岡市郎さん  
東川町長

Ichiro Matsuoka

1951年生まれ。1972年東川町奉職。農林課長補佐、社会教育課長、税務住民課長を経て、2003年に退職。同年、東川町長に就任。現在5期目。



東川町を開拓した入植者と掘立小屋 提供：東川町

源保全センターだ。同社はコープさっぽろ、東川町、JAひがしかわにより設立され、大雪旭岳源水を加熱殺菌処理せず無菌充填したナチュラルミネラルウォーターのペットボトルを製造販売。売り上げの一部を東川町では水源涵養につながる森林整備、すなわち植林などの費用にあてている。



手づくりの椅子をプレゼントする「君の椅子」事業。毎年異なるデザインが選定され、町内の家具職人が製作する



2014年に移転・新築した東川小学校の外観。先進的な授業が行なわれている



生後100日を過ぎた赤ちゃんに椅子を届ける町役場の職員たち 提供：東川町



(上)JETプログラムで派遣された外国人職員とふれあう東川町の子もたち 提供：東川町

(左)町内にある福祉専門学校日本語学科の入学式。多くの留学生が東川町で暮らしながら学ぶ 提供：東川町



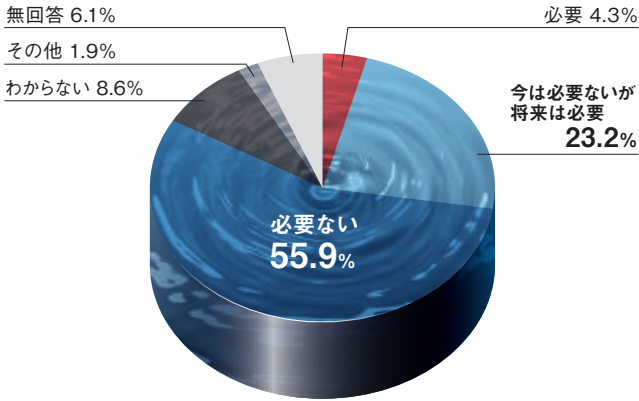
## 子どものころから 多様な出会いを

東川町は木工の町でもあり、家具やクラフトの工房が多い。ここで生まれた子どもたちには、手づくりの「君の椅子」が贈られる。

子どもを迎える喜びを地域の人々で分かち合えたら——旭川大学大学院ゼミからそう提案されたプロジェクトに松岡町長はいち早く共鳴し、他市町村の先頭を切り2006年(平成18)から実施している。

このことが象徴するように、若い移住者が目立つ要因の一つが充実した子育て・教育環境だ。1987年(昭和62)を最後に廃校がなく、4つの小学校と1つの中学校を維持している。2014年(平成26)に新築移転された東川小学校は、16haの広大な敷地に体験農園や地域交流センターを併設。幼保一元化と子育て支援センターの合築施設があり、15歳までの医療費の全額助成など数々の子育て支援制度も早くから導入してきた。「教育力は大都市にひけをとりにせん。目指すのは『Teach Less, learn more』。つまり先生が一方的に教えるのではなく、子どもたちが自らの意思で学ぶ姿勢を育むことです。さまざまな出会いを通じてなぜ?と問いを立てながら成長していく子どもたちを育てたい」

■あなたは今、水道が必要だと思いますか？ (町民アンケート)



水道事業対象地区1307世帯に発送。1066世帯より回収(回収率81.6%)  
 出典：2005年4月発行『広報ひがしかわ』より抜粋

出会いといえば、東川町の子どもたちは外国人とふれあう機会が多い。町では総務省などのJETプログラム(語学指導等を行なう海外青年招致事業)を活用し、外国語指導助手、国際交流員、スポーツ国際交流員として20名近い外国人職員を配置。町主催の短期日本語・日本文化研修事業では東アジア諸国を中心に10年間で延べ3000人を超える研修生を招いた。また、町内の福祉専門学校で日本語学科に加え、日本初の町立日本語学校が留学生を受け入れている。在住の外国人は380人と人口の5%(2018年12月時点)を占める。

「小さなまちにこれだけ国際教育の機会があるのは珍しいと思います。次代を担う子どもたちには、外国の人と違和感なくコミュニケーションできる人になってほしい」

### 3つの「間」を共有し「SOS」で進む

移住者に聞くと皆さん共通して話すことがある。よそ者でも分け隔てなく受け入れてくれる、と。「小さいまちのよさは3つの『間』を共有しやすいことです。仲間、空間、時間。気心の知れた人といつもの場所と同じ時を過ごすのがいちばん楽しい。ここでは壁なくすぐ親しくなり、それができます」

とはいえ、小さなまちがすべてそうとは限らない。東川町の何がそんな風土をつくっているのか。「役場の職員と住民の距離が近いことも要素の1つではないかと。役場に電話したら『土日でも構いませんからいつでも来てください』と親身に案内をしてくれた、それで移住することにしました」という方が結構いらっしゃいます。たしかに東川町の職員と接していると、堅苦しい雰囲気もまったく感じない。イベントなどで外の

人との交流が多く、自然と役場の体質も外に開かれていったのは」と松岡さんは推測する。

東川町国際写真フェスティバルや写真甲子園(P19)21参照)などの事業を委託していた札幌の企画会社2005年(平成17)に倒産。関連業務を町の職員が直接手がけるようになった。これが結果的に、民間企業や内外の写真家、デザイナーなどとの人脈を広げ、外に開かれた役場を生んだ。

「公務員はよく『断り上手』と言われます。前例がない、他でやっていない、予算がない。しかし、前にも他でもしていないことだから挑戦しがいがあり、よい事業なら補正予算を組めばいい。失敗したらやり直せばいいんです。大切なのは『SOS(Speed Open Service)』。スピード感をもって情報を公開しサービスを向上させることです」

独立独歩の気風を醸した転機として特筆すべきは、市町村合併しない決断。2003年(平成15)、その公約を掲げて町民に選ばれた町長が松岡さんだ。

### 交付金や寄付金を活用し未来をつくる事業に投資

市町村別の集計は未公表だが、



「平成の名水百選」にも選ばれている東川町の銘水「大雪旭岳源水」。源泉から数百m離れたこの取水場で自由に汲むことができる

東川町に交付された地方創生推進交付金は、全道でも札幌市に次ぐトップクラスといわれている。

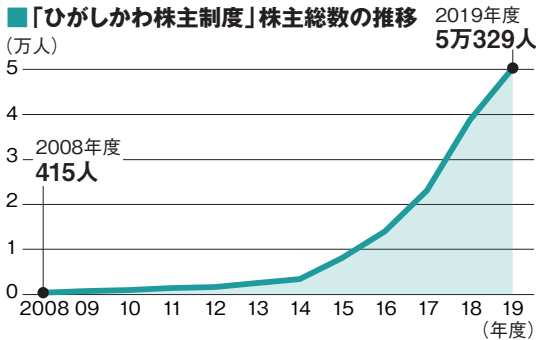
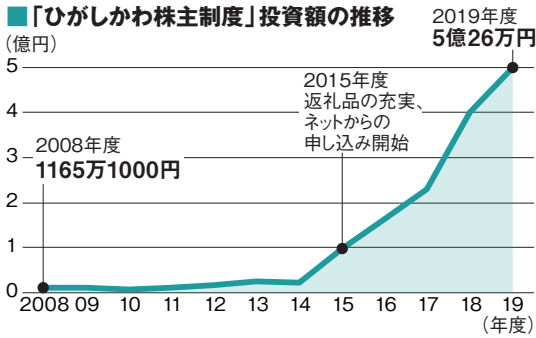
「過疎地では、例えば10億円の公共施設を建設するには過疎債(注1)の起債により3億円の負担で済みますが、東川町は過疎地の要件からわずかに外れており、6億円を負担しなければなりません。財源は当然、税収になります。住民の負担を軽減するために、少しでも有利な辺地債(注2)などの起債や、新しく制定される交付金や補助金を活用せざるを得ません。それがたまたま多かっただけの話です」

だが見方を変えれば、他の自治体と横並びではない独自の事業が多く、大都市から地方への移住促進や外国人材の活用など国の施策の方向性とも合致するからこそ、

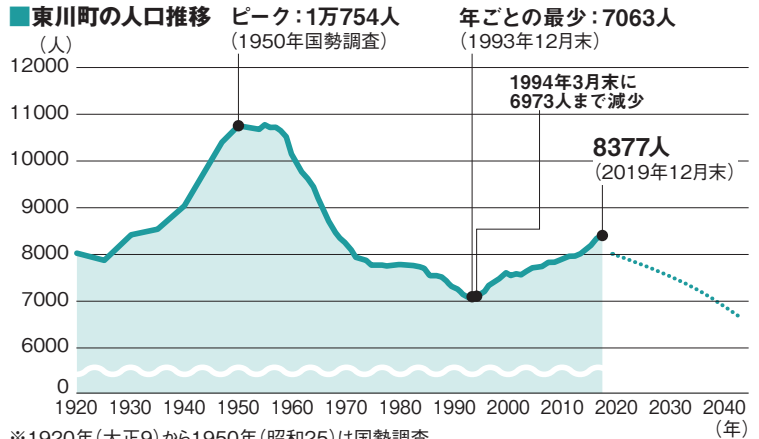
(注1) 過疎債

過疎地域に認定された市町村が発行する地方債。正式には過疎対策事業債。過疎法による財政上の優遇措置の一つで、学校や地場産業の振興施設、観光施設など、公共施設の整備費として起債が認められている。





出典：『東川町史 第3巻』p52より。2019年度の数値は2020年8月発行『広報ひがしかわ』による



※1920年(大正9)から1950年(昭和25)は国勢調査  
 ※1954年(昭和29)から2018年(平成30)は住民基本台帳調査(毎年12月末時点)  
 ※点線部分は国立社会保障・人口問題研究所による将来推計  
 出典：『東川町史 第3巻』p87より

2019年 (令和2)、企業版ふるさと納税による寄付は7社から約1億5000万円、ひがしかわ株主制度は投資株主総数約5万人、投資額約5億円になった。資金は人材育成や奨学助成、「写真の町」

交付金を引き出せたともいえる。「財政規模は拡大し、以前より借金総額はたしかに多くなりました。しかし民間と違い、5〜8割がたの元利を国が肩代わりする借金なので返済金額は変わりませんし、逆にそれで学校施設や公園用地や山林などの資産が増えました。将来のために必要な事業には投資すべきだと思います」

地方創生に取り組み自治体へ寄付した企業が税制上の優遇措置を受けられる「企業版ふるさと納税」と、「ひがしかわ株主制度(寄付を投資と位置づけ、個人のふるさと納税をこっとう呼び換えている)」も貴重な財源の一つだ。

この考え方を東川町では「適疎」と称している。「互いに顔が見えて名前を呼び合いい、3つの『間』を共有でき、なおかつ一定の行政サービスの水準を保てる人口規模が適疎です。今回のコロナ禍で人々の意識も過密から適疎へと移りゆくはず。都市と地

東川町の人口は1994年(平成6)に7000人を切って底を打ち、移住者の増加で2014年(平成26)に目標値の8000人に回復した。しかし、基幹産業である農業とのバランスをとるため、農地の宅地転用を伴う定住人口の無制限な増加は求めていない。あくまでも8000人規模を維持し、留学生事業やひがしかわ株主制度などによってなんらかのかたちでまちに関与し、人と呼ばれる「関係人口」の拡大を目指す。

### 「適疎」をキーワードに つなぎ続けられる社会へ

推進などに活用されている。ひがしかわ株主は投資したい事業を選べ、株主優待は宿泊施設の無料利用、水や米など東川ならではの地産品。株主総数は直近5年間で約6倍になり、東川町のファンは着実に増えてきた。

方が生ずるうえで未来性のある考え方ではないでしょうか。互いに補完するのは『つなぎ』ことの繰り返しです。木も切ったら植えるのだし、水が自然界を循環するように人も巡り減っては増える。つなぎつづけ循環できる社会にしていくことが重要だと思います」

コロナ禍で東川町も製造業や観光サービス業が被害を受けた。ポストコロナに向け、建築家の隈研吾氏とコラボした家具デザインコンペを今年からスタートする。第1回のテーマは、生まれた子どもをようこそと迎え入れる「君の椅子」にちなんで「木の椅子」だ。

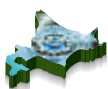
さらに「アイヌ文化をテーマとした映画を近隣の自治体と連携して製作・発信し観光振興につなげたい」との構想も松岡さんは熱く語った。2020年(令和2)11月には、これも日本では数少ない公設民営となる酒蔵(p36~37)が竣工している。他の地域がやらないことに挑みなさいと職員に発破を掛け、責任は自分が負えばよいと覚悟を決めてまちづくりの足元を固めてきたその目は、はるか先を見据えている。

「適疎」をキーワードに つなぎ続けられる社会へ

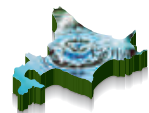


### (注2) 辺地債

地方債の一種。正式には辺地対策事業債。辺地とその他の地域との間における住民の生活文化水準の格差の是正を図ることを目的とする公共施設の整備や情報通信基盤整備等に対して充当される。



【まちづくり】



# 地下水を持続可能にする 自然の恵みと人々の努力



インタビュー

滝沢 智さん

東京大学大学院  
工学系研究科 教授

Satoshi Takizawa

1959年東京都生まれ。1983年東京大学工学部都市工学科卒、同大学院博士課程修了。長岡技術科学大学助手、建設省(当時)土木研究所主任研究員、東京大学工学部助教授、アジア工科大学助教授(JICA派遣)などを経て2006年から現職。研究分野は「アジアの都市水システム」「都市と地下水環境」「高度浄水処理」「都市水システムの計画および維持管理」など。著書に「環境工学系のための数学」「水質環境工学」などがある。

全町民が地下水で暮らす東川町は、「上水道のない町」を標榜している。一般的な上水道を「集中管理型」の水供給システムとするならば、各戸が電気ポンプなどで地下水を汲み上げて利用する東川町は「分散型」といえる。町域全体をカバーする水道網をつくらないことのメリットとデメリットについて、東京大学大学院の教授で厚生労働省新水道ビジョン策定検討会の座長などを務める滝沢智さんに聞いた。

## 「上水道のない町」 その水源と定義

東川町は「上水道のない町」をセールスポイントの1つにしていますね。ただし、厳密に言うところ「水源が地下水」であることと、水道法が定める「上水道」がないことは、意味合いが少し異なります。

日本の水道法における「水道(上水道)」とは、「導管や工作物により、水を人の飲用に適する水として供給する施設の総体」を指します。そして給水人口が5001人以上ならば、たとえ水源が地下水でも「上水道」ですし、給水人口

が101人以上5000人以下ならば「簡易水道」。いずれも水道法の対象となる「上水道」です。つまり、日本では水道を給水人口で定義しているのです。熊本市の水源は地下水ですが、約74万人が住むので「上水道がある」ということになります。

東川町の特徴は、約8300人が住んでいるにもかかわらず、その圧倒的多数が「自前の井戸」で給水していることです。「専用水道(注1)や、水道法に基づく水道事業には該当しない「飲料水供給施設(注2)があるにせよ、その割合はごくわずかで、ほとんどが自前の井戸です。「上水道のない町」

と聞いて、たしかにそうも言えると思いました。

ちなみに、飲料水供給施設は、水道法に基づく水道事業ではないため塩素消毒の法的な義務はありませんが、多くの自治体では条例により塩素消毒を行なうように定めています。同様に、個人宅に設置された井戸についても、衛生的な安全性の確認が必要です。

東川町が飲料水を自前の井戸で供給できる最大の理由は、質のよい地下水が大量に存在するからで

## 良質だからできる 「分散型」の水供給

す。実は、首都圏も湧水は多いのですが、汚染されて飲料水に適さない場合がほとんど。その点、東川町は汚染を受けにくい土地に位置し、人口密度があまり高くないので汚染される危険性が低いうえ、地下水の保全条例を定めて「地下水を守る努力」をしています。

さらに、地下水の利用量が多すぎない。熊本市も地下水は豊富ですが、工場を誘致するなどした結果、利用量が増えて地下水(注3)が小さくなったので、地下水を涵養しようとしています。

厳密な定義は別にして、東川町が「上水道のない町」を唱えることで、対外的には「これからも地下水を守っていく」と宣伝できますし、町民に対しては「自分たちは地下水を守らなければいけない」と訴えることにもなる。町として定点観測用の井戸を持ち、定

(注3) 地下水盆

1つの大規模な帯水層、または帯水層群の分布地域のこと。日本には210の地下水盆が存在するとされ、特に九州地方が突出して多い。

(注2) 飲料水供給施設

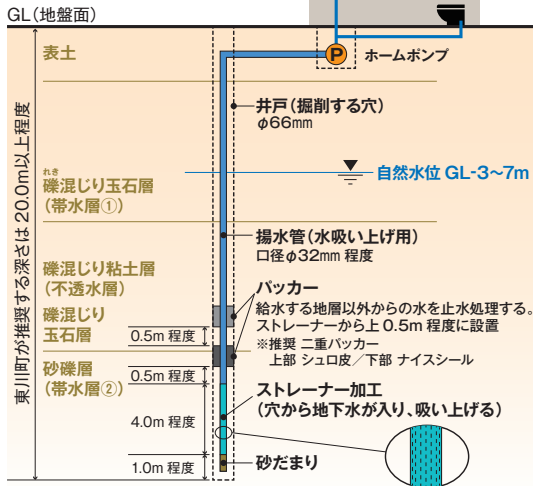
50人以上(地下水汚染地域にあつてはこの限りではない)100人以下を給水人口とする飲料に適した水を供給する施設。

(注1) 専用水道

寄宿舎や社宅(マンション)、療養所などにおける自家用の水道。水源の規定はない。

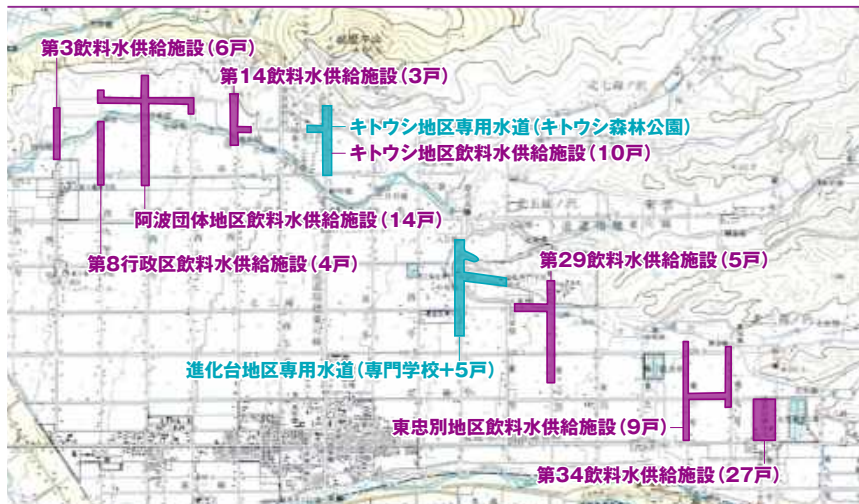


東川町の飲料水供給施設。井戸を掘っても地下水が得られにくい地域に設置している



### 東川町の給水標準図

※東川町が衛生的で安全な生活用水を町民が得るための参考として、個人が設置する標準的な飲用水施設の構造を記したもの  
 ※地層の状況は場所によって異なること、井戸を設置した場合は飲料水として問題ないか水質検査を行なう必要があること、水質検査の結果は井戸施工業者から必ず受け取ることなども併記している  
 出典：東川町発行『東川町の地下水 2020年度版』



### 東川町の飲料水供給施設と専用水道

※飲料水供給施設と専用水道は東川町が整備し、飲料水を供給  
 ※使用料は無料。ただし、受益者分担金ならびに維持管理に要する経費は徴収している  
 出典：東川町発行『東川町の地下水 2020年度版』

## 当たり前ではない 自分たちの財産

これからも地下水を維持するために気をつけたいのは、水質の事故を起こさないことです。飲み水から大腸菌が検出されたり、誰かが健康を害したりすれば、イメー

期的に水質を検査して結果も公表していますし、地下の地層図も示しています。地下水をたんにPRするのではなく、考え得るすべての対策を講じていると思います。その姿勢が、良質な地下水を維持し、「集中管理型」ではない、東川町ならではの「分散型」水供給システムを可能にしているのです。

また、下水管や合併浄化槽といった地下埋設物にも注意が必要で、東川町の地下水位は3〜7mと比較的浅いので、仮に下水管から漏れると汚染が広範囲に広がる恐れがあります。敷地が広ければ自宅ですら洗車をする人も多いため、ちよつとした土やコンクリートのすき間から洗剤が地下に浸透する可能性がありますので、車はガソリンスタンドや洗車場で洗ったほうがよいでしょう。そうしたリスクを理解し、地震などに備えて3日分の飲料水を用

ジが悪くなります。大雨で家畜の排泄物が流れ出て、地下水を汚染した事例も海外にはあります。地震もリスクです。2018年(平成30)9月の北海道胆振東部地震では、停電でポンプが動かせず水が汲めなかつたと聞きました。2016年(平成28)の熊本地震では、地盤が緩んで帯水層に砂が混じり、飲むことができま

「当たり前」と思わずに、自分たちの財産として子や孫の世代に受け継いでほしいですね。(2020年12月18日/リモートインタビュー)

意する、自宅を改築する際は技術の高い施工会社に依頼するなど、一人ひとりの心備えが重要です。かつて、上水道が開通した当初は「水が来た」と喜ばれましたが、今は当たり前になってしまいましたが、今の日本で、東川町のように地下水だけで暮らせる地域は極めて稀です。その環境を維持するには「地下水を大切にしよう」と町民が心を合わせ、努力を続けることが必要です。



大雪旭岳湧水を汲んで持ち帰る札幌市在住のご家族。「東川町の水は有名」と言う



### 【地下水と水道】



【産業づくり】

# 岐阜の杜氏が惚れた

# 東川の「水」と「人」

岐阜県中津川市で143年続いた蔵元「三千櫻酒造」が東川町に移転を決め話題となった。杜氏を兼ねる社長の山田耕司さんは「水や米、気温など環境が抜群」と東川町に惚れ込み、職人全員で移住を決断。いよいよ日本酒の仕込みが始まるタイミングに立ち会った。

## 老舗の蔵元が 東川にやってくる

2020年（令和2）11月、東川町に初の酒蔵が誕生した。全国でも数少ない公設民営型の酒蔵である。東川の豊かな天然水と主要農作物である米を活かして新たな特産品をつくりたいと、町が酒造施設を建設し、運営会社を公募。その呼びかけに応えたのが、岐阜県

の老舗蔵元、三千櫻酒造だった。

1877年（明治10）創業の三千櫻酒造は、家族経営の小規模な酒蔵ながら、一世紀半にわたって岐阜の中津川で地酒「三千櫻」をつくりつづけてきた。今回、慣れ親しんだ故郷を離れ、蔵人やその家族を連れて遠い東川へ蔵ごと移転するという大胆な決断をした背景について、自ら杜氏も務める六代目社長の山田耕司さんは次のように語る。

「創業以来使ってきた土蔵は老朽化が激しく、改修もできない状況でした。一方で温暖化により、岐阜の地で安定した酒をつくることは年々難しくなっていました。100年先まで三千櫻を残し伝えるため、考え抜いて選んだのが『移転』という道でした」

すでに数年前から、移転先の候補地を探して北海道の各地を回っていた山田さん。東川町の取り組みを知ると現地を訪れ、すぐに心



1





1この日は町外の酒米を用いての試運転だったが、北の大地で始まった酒造りに杜氏たちの顔もほころぶ。酒造りには地下60mから汲み上げた水を用いる 2蒸した酒米を麴室(こうじむろ)に運び込み、種麴(たねこうじ)を振りかける 3東川町への移転について語る三千櫻酒造六代目の山田耕司さん 4竣工間もない酒造施設。東川町が建て、三千櫻酒造が酒造りを行なう新しい拠点

を決めた。

「いい水と米に恵まれ、寒冷な気候も酒造りに最適でした。何より役場や町の人たちの熱意、行動力が他所とはまるで違う。ぜひここで一緒に酒をつくりたいと強く思いました」

ある夜、松岡町長との雑談のなかで企画の話が出ると、町長がその場で決定。翌朝、役場の課長職全員にメールで周知されていたことがあった。そのスピード感に驚いたという。

### 水が変わっても つくる酒は三千櫻

ただし、いい水があればいい酒ができるといった単純な話ではないと山田さんは言う。酒造りで重要となるのが水の硬度。硬度が高いほど水中のミネラルが多く、酵母が活性化し発酵が進みやすい。「中津川の水は硬度8の超軟水で、醸造に時間がかかりアルコール度も上がりません。でもそれが、割り水なしの原酒で飲める酒という三千櫻の方針には合っていました。ところが、東川の水は硬度60〜80、中津川の10倍の硬水です。当然、同じ製法ではアルコールが強く出るはずなので、仕込みの配合など

設計を変えなければなりません。水や場所が変わっても、私たちがつくるのはあくまで三千櫻なので「す」

山田さんは数年前に、メキシコで日本酒づくりの指導をした。メキシコの水は、日本にはない硬度230の超硬水。それでも発酵を抑えるさまざまな対策を講じて、中南米初となる現地生産の本格的日本酒をつくり出すことに成功した。その時の経験が、どんな条件のもとでもいい酒はつくれるという自信につながっている。

「水は酒の命と言われるけれど、同じ水を使っても、うまい酒もあればまずい酒もある。結局、どれだけいい酒をつくりたいかという人の思いの強さが一番大事なんです」

### 真に東川の地酒と なるためには

取材当日、ちょうど製造設備の試運転をしていた。「いよいよ明日から、東川の米で初の仕込みが始まります」と山田さん。これから、東川や道内産の酒米を中心に各地の米を組み合わせて、新生三千櫻の味をつくりあげていくという。

「例えば、ワインはその土地で採

れたブドウをその場所で加工するという意味で農業の延長。でも日本酒の場合、原料の米はどこからでも持ってこられる。つまり工業製品に近いのです。それが日本酒の自由度でありおもしろさだから、地元産の米だけにこだわることは「ないです」

それでは、地酒を地酒たらしめるものはなんなのか。それは、「動かすことのできない水と人」だと山田さんは言う。

「いずれは、東川で生まれ育った人に、この蔵を継いでもらうのが私たちの使命だと考えています。そのため技術や経験は惜しみなく伝えていきたい。東川の人が東川の水でつくった酒こそ、初めて本当の意味での東川の地酒になるのではないのでしょうか」

年明けには、この蔵でつくられた初めての三千櫻がでかがる。これから100年先まで、三千櫻が東川の地酒として人々から愛されるよう、三千櫻酒造は東川の人たちとともに、ゆつくりとこの地で酒を育てていくこうとしている。

(2020年11月12日取材)





【周辺地域】



# 一本芯が通っている町

## ——周辺から見た東川の評価

ここまでは東川町に住んでいる人たちに話を聞いてきた。では、周辺地域に住む人たちは、東川町をどのような目で見ているのだろうか。隣接する東神楽町で生まれ育ち、今は旭川市にある一般社団法人大雪カムイミンタラDMOに勤める小原弘慎さんに、東川町のまちづくりやこの圏域における存在感などを語ってもらった。

### 東川町は大雪山のベースタウン

——カムイミンタラDMO(注)の概要について教えてください。

私たちは地域の魅力を引き出し、外から人を呼び込むためのマーケティングや事業の企画・実行、または地域内のさまざまな機関や団体、人材を調整する役割を担っています。立ち上げて約3年が経過しました。組織の構成員は、行政や銀行からの出向者、そして生え抜きの職員。私は東川町と接する東神楽町の出身で、旭川市役所からの出向です。

私たちが管轄するのは、旭川市鷹栖町、東神楽町、当麻町、比布町、愛別町、上川町、東川町の1市7町からなる「大雪エリア」。大雪山国立公園を核とするこの圏域は、アイヌの人々が「神々の遊ぶ庭」カムイミンタラと呼んだ場所なのです。

——大雪エリアで東川町はどのようなポジションですか。

東川町は上川町とともに大雪山国立公園をまたぐようにあります。大雪山の最高峰「旭岳」は東川の町域ですので、いわば大雪山のベースタウン的な存在です。

そして、東川町には「この自然のなかで暮らしたい」「スキーや登山などアクティビティのツアーを生業として生きていきたい」「この自然が生む水や農作物を用いた飲食店や食品加工で暮らしたい」という人たちが集まっています。しかも、その人たちはいろいろな地域からやってくる。ほかの地域もしつかり見たうえで大雪山の魅力に惹かれてこの地に住み着いているのです。

「この地域にはこんな魅力がありますよ」と私たちが逆に教えてもらっています。その意味で、東川町はツアーのメニューづくりやプロモーションなどの面で一緒に活動しやすい地域です。



一般社団法人 大雪カムイミンタラDMOの小原弘慎さん

#### (注)DMO

Destination Management/Marketing Organizationの略称で、観光地域づくり法人のこと。その地域の自然や食、芸能、風習などの観光資源を活かし、地域とともに観光地域づくりを行なう。



1紅葉が美しい秋の旭岳。北海道でもっとも高い山で「日本の百名山」にも選ばれている 2旭岳の山頂付近をトレッキングする人たち。標高1600m地点までロープウェイが通じているため、比較的気軽に楽しめる 3東川町の森のなかを走るロードレーサー。タイムではなく健康促進を目的とするイベント「キトウシ国際サイクリング」も2018年に始まった 提供：東川町



## 新しいことに力を割いている

——「写真の町」宣言や投資型のまちづくりで注目される東川町をどう見ていますか？

自分たちの町をブランド化する、新しいコンセプトを打ち出すところなど、すべての面で一本芯が通っていると思います。

次々といろいろなことを展開しているように見えますが、「写真の町」を言い出したのは35年も前のことです。それ以来、何を言われても「うちはこういう町です」とブレません。小さな施策の積み重ね

ねで認知度が高まったのは、今まさに昔からの取り組みが結実しつつあるからです。

——さまざまな種まきと辛抱が花開いたと見ていいでしょうか？

その通りです。物心ついたころから東川町を見ていますが、最初に走りはじめた人たちの跡を継いで、途切れずタスキをつないできたと思います。しかも、それは松岡町長を含む行政の人間に限った話ではなく、信念を貫く力のある人が事業者や住民のなかに何人もいます。

——取材時に、役場の人たちが楽しそうに、でも夜遅くまで働いていたのが印象的でした。

東川町は企画を立てたり、新しいものを生み出すことに比較的時間や能力を割いているような気がします。

## 新旧の住民同士が混ざり合う構造

——旭川市の職員の立場で東川町をライバル視しますか？

敵とは考えていません。人口33万人の旭川市という都市基盤のうえに、農業一本で突き進む町、あるいは林業が強い町といったそれぞれの個性が組み合わさって、45万〜50万人がこの圏域で暮らしているのです。自治体の職員は別にして、住民が「ここまでは東川町、ここからは旭川市」と意識することはほぼないと思います。

——旭川市が隣にあるのは、東川町の住民にとって心強いそうです。

旭川市は、この圏域における都市基盤の中核を担っています。例えば、医療に関しては道北圏を網羅しています。利尻島や稚内の重症患者はドクターヘリで旭川市に搬送します。古くから国防の拠点に位置づけられ、自衛隊もあります。旭川市は、福祉や消防、ごみ処理、上下水道など「圏域全体の発展」を意識する職員が多いと思

います。

——東川町に期待することは？

今のままでよいと思います。人口も暮らしやすさを維持できるように考えていますし、観光客もオートバスターミズムにならないような水準を保つことを意識しているようです。

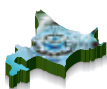
外から来た人と元々住んでいた人との関係性というのとはどのような地域でも難しい面があるものですが、東川町の場合は比較的うまく混ざり合っているように見えます。

利便性の高い市街地に住む人、自然のなかに住む人、暮らし方はさまざまですが、昔から住んでいる人と移住してきた人との住み分けもあまりないように思います。豊かな自然とある程度の利便性も兼ね備えている。町の構成がよいと思います。

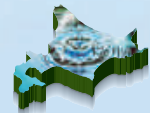
——DMOからのメッセージを。

ぜひ真夏の暑い時期、もしくは厳寒期にお越しください。特に2月は空気がきれいです。ダイヤモンドダストが普通に見られますし、「マイナス25℃」を体感することもできますよ。

(2020年12月25日/リモートインタビュー)



【周辺地域】



【文化をつくる】

編集部

# 北の大地の小さな町で

# 「未来への開拓」進む

## 「？」ばかりの 初訪問ノート

適切なたとえではないかもしれないが、東川町は「重箱に入ったおせち料理」のような町だ。パッと見ただけでは何がどうすごいのかよくわからないが、いざ蓋を開けてみると、伊達巻、いくら、かまぼこといった色とりどりの料理（取り組み）がぎゅっつと詰まっている。しかも重箱のごとく重層的に。「こんな時代に人口が増えていくちにあるって」「地下水だけで暮らしているらしい」「写真に力を入れてるんだって」。そんな評判だけを耳にして東川町へ行く

と面食らう。企画段階のリサーチで訪ねたときがそうだった。

旭川空港からレンタカーに乗って10分ほどで東川町に着く。中心市街地を目指して東に向かう。少し店が出てきたなと思ったら、す

ぐ町はずれになってしまった。Uターンして道の駅ひがしかわ「道草館」へ。店内は賑わっていたが、外に出ると中心部なのに人影があまりない。カフェは1軒1軒が離れているし、地下水は見えず、カメラをぶら下げている人もいない。初めて東川町を訪ねたその日の記録ノートの「？」で埋まった。

## 自分の言葉で話す 自治体職員

この町はちょっと違う——そう思ったのは2日目だ。施策について聞くために東川町役場を訪ね、税務定住課の吉原敬晴さん、産業振興課の朝倉祥貴さん、企画総務課の竹田慶介さんとお会いした。

実は、初日に公園で犬と遊んでいた男性から「中心市街地から遠い宅地にはまだまだ空きがある」という情報を得ていた。人口が増えているなら宅地ががら空きなのはおかしい。そう疑問をぶつける

と、「空いていいんです。新しい人たちが一気に入ると、みんな揃って歳をとるのでバランスが悪い。ぼつぼつ売れば十分です」と吉原さんは笑った。

中心市街地ならすぐに買い手がつくのはわかっているが、町内4つの小学校の児童数が偏らないように宅地造成を行っていると明かす。そして、こちらのしつこい質問にも「私はこう思う」と、誰の顔色も窺わず即答することにも驚いた。3人ともだ。こういう人々が住む東川町に俄然興味が湧いた。

まずは開拓以来の歴史を『東川町史』（1975）と『東川町史第二巻』（1995）から振り返りたい。

## 米づくり専門の 純農村として

東川町の入植開始は1895年（明治28）。屯田移住ではなく、民間植民移住だった。香川団体30戸、

富山団体20戸、愛知団体14戸、徳島団体8戸などが入地。1897年（明治30）12月、旭川村から分轄して東川村が設けられた。「古老の昔話」として佐々木成秀（ちりひで）さんはこう語る。

「入植当時にもっとも困ったことは食料がないこと。ヒエやアワを食べて、コメはぜいたく品だった。（中略）熊も恐ろしかったが、道路をつけに来ている囚人の方が怖かった。看守が何人も殺されたり、民家に入ってきたりしたので、入植者が鉄砲をもって自衛したこともある」

分割新設当時の東川村は主に畑作だった。北海道の北限に近い上川地方に稲作は適さないと考えられていたからだ。頼みの綱の畑は連作障害によって虫害、霜害などが起き、転出する農家が相次ぐ。たまたま東旭川村（当時）と村内の富山団体が水田試作に成功し、稲作地帯への道が開けた。

100年前の第1回国勢調査







樹林地を鋸や斧で伐木する開拓民 提供：東川町

### 東川町略年表

西暦	和暦	出来事
1895	明治28	殖民地貸付始まる。香川、富山、愛知、徳島県人などが入植。戸数80戸、人口472人
1897	明治30	旭川村から分轄して「東川村」が新設
1899	明治32	東川小学校開設
1903	明治36	東川村土功組合設立
1909	明治42	独立した二級町村「東川村」となる
1912	大正元	農家戸数が1268戸。本質的な農村へ
1927	昭和2	旭川電気軌道(電車)開通
1934	昭和9	大雪山一円が国立公園に指定される
1943	昭和18	水温上昇施設(遊水地)着工
1947	昭和22	大洪水で開村以来の大被害となる
1948	昭和23	東川村農業協同組合が発足
1959	昭和34	町制施行で「東川町」に
1968	昭和43	旭岳ロープウェイが全線開通
1970	昭和45	米過剰による生産調整始まる
1972	昭和47	旭川電気軌道(電車)が廃止
1975	昭和50	農村総合整備モデル事業、道営水質障害対策事業に着手
1979	昭和54	北海道神宮の神饌米指定を受ける
1982	昭和57	開拓記念「羽衣公園」、郷土館オープン
1985	昭和60	「写真の町」宣言を行なう。第1回東川町国際写真フェスティバルなど開催
1987	昭和62	木彫看板第1号製作(東川町商工会議所青年部)
1994	平成6	第1回全国高等学校写真選手権大会「写真甲子園」開催 人口が7000人を下回る(3月末) 「東川町開拓100年記念式典」開かれる
2002	平成14	「美しい東川の風景を守り育てる条例」制定
2003	平成15	町の合併問題検討委員会が答申。賛否割れ、両論併記 町長選で松岡市郎氏が初当選 移住・定住支援策を拡充。アパート新築助成や起業時最大100万円など
2004	平成16	幼児センターが幼保一元化特区に 「大雪旭岳源水公園」がオープン
2005	平成17	東川町が景観法により定義される景観行政団体となる
2006	平成18	「グリーンヴィレッジ東川」分譲開始 「君の椅子」初めての贈呈式
2007	平成19	忠別ダム竣工式が行なわれる JAひがしかわが水稲種籾の温湯殺菌消毒施設を導入
2008	平成20	機構改革で「写真の町」課を新設 「写真の町」ひがしかわ株主制度がスタート
2010	平成22	第2回地下水サミットを東川町で開催。11自治体が参加
2011	平成23	地下水の大量取水を条例で制限。ニセコ町に次ぐ道内2例目 不妊治療費の自己負担分を町が全額助成
2012	平成24	「東川米」が道産米として初の地域団体商標登録
2013	平成25	「大雪旭岳源水」のボトリング工場が稼働開始 「大雪旭岳源水」が地域団体商標登録。飲料水の地域ブランドは全国初 「ひがしかわ写真少年団」発足。初の撮影会
2014	平成26	旭川福祉専門学校日本語学科で授業開始 「写真文化首都」宣言を行なう 42年ぶりに人口が8000人台に回復
2015	平成27	写真甲子園の海外版「高校生国際交流フェスティバル」スタート
2018	平成30	町内の幼・小・中・高校で異文化理解を深める新教科「Globe(グローブ)」の授業開始
2020	令和2	岐阜県から三千櫻酒造が移転。日本でも珍しい公設民営型の酒蔵誕生

参考文献：「東川町史」(1975)、「東川町史 第二巻」(1995)、「東川町史 第三巻」Web版(2020)

## 議論し決めたら即行動 その共通基盤は？

東川町は水に恵まれていたうえ、

(調査日：1920年10月1日)は1360戸、8009人。戸数は約3分の1だが、人口は今とほぼ同じ。1938年(昭和13)の村勢要覧では、総戸数1388戸のうち約78%が農家だ。戦後、過疎対策を兼ねて企業誘致に乗り出し、旭川木工団地東川センターなどを誘致するが、基本的には忠別川の水を簡易的に導水し、施設費や維持費を少額に抑えて水田経営を続ける純農村だった。

1903年(明治36)に東川村土功組合が設立されたこともあり水争いはなかったようだが、忠別川と倉沼川は頻繁に氾濫した。戦時中に国策として建設された水力発電所から流れる冷たい水で冷害に見舞われたことは何度もある(その後、水を温めるための遊水地を整備)。高度経済成長期には、中心市街地の人口が増えた影響で生活汚水が農業用水路に流れ込み、農業用水路下流の水田に被害が出た。そこで興味深いのは、全道町村に先駆けて東川町が1975年(昭和50)に道営水質障害対策事業と、農村総合整備モデル事業の集落排水事業を採択し、用排水路を分離、

汚水浄化処理施設を速やかに設けようと動いたことだ。純農村で飲み水を地下水に頼る東川町で土と水は生命線。だからそれを脅かすことがあれば自分たちで動き、すぐに解決する。社会学者の山下祐介さんは『限界集落の真実』(筑摩書房2012)で「古くから続く村落型(農山漁村)と開拓村型は、農地や山林、村の文化など継承すべきものがある分、議論はしやすい」と記すが、東川町の継承すべきものは土と水なのか。もちろん全国の稲作主体の農村はどこともそうだが、決定的な違いは「町民全員が地下水で暮らしている」という点。昔は井戸、今は

電動ポンプで地上からは見えない水を飲む。それは公が保障しない自己責任の行為なので、一人ひとりが規範を守り、水源などにおかしなことがないか目を配る。それが連帯感を生み、自分たちの土地の課題に関心が高いのではないか。

## 住みたいと望む人を 受け入れるために

今、都市部から地方への移住が目ざされている。NPO法人ふるさと回帰支援センター(東京)の発表によると、コロナ禍以前の2019年でも相談件数は前年比約20%増だ。さまざまな施策が実を結



## 東川町周辺自治体の夜間人口と昼間人口

	夜間人口	昼間人口	昼夜間人口比率
旭川市	339605	341732	100.6
鷹栖町	7018	6136	87.4
東神楽町	10233	8408	82.2
当麻町	6689	6052	90.5
比布町	3777	3362	89.0
愛別町	2976	2948	99.1
上川町	4044	4293	106.2
東川町	8111	8201	101.1
美瑛町	10292	10206	99.2

昼夜間人口比率とは夜間人口100人当たりの昼間人口割合で、100を超える他の市町村から通勤・通学などで人が集まっているといえる。東川町は昼間人口が夜間人口を上回る。町外からの通勤・通学者が多いことがわかる。上川町は層雲峡温泉など有名な観光地を抱えるため、観光産業従事者が多いと思われる。

出典：平成27年国勢調査「従業地・通学地集計 従業地・通学地による人口・就業状態等集計」（総務省統計局）

び、外から人を引き入れることに成功した東川町にとって、さらなる人口増が望めるチャンスと普通は考えるが、宅地造成の件でもわかるように、むやみに人を呼び込もうとはしていない。

線を張っているようにも見えない。店舗に関しては概論で鈴木輝隆さんが語ったように、空き店舗は町がある程度管理し、見込んだ人に貸すこともある。一軒家を建てて移り住もうとする人には「東川風住宅設計指針」を示す。これは景観と街並みをつくるための協力を求めるようであり、実は東川町の価値観や哲学を提示し「うちの町はこういう町ですが、それでも住みますか？」と一種の選択を迫っていると見えなくもない。賛同できる人ならば、移り住んでもきつとおかしなことにはならないからだ。

2014年から始まった「地方創生」は、東京一極集中の是正と地方の担い手不足に対処するものだ。「まち・ひと・しごと創生本部」のHPに「地方創生関係交付金は、自治体の自主的・主体的な取り組みで、先導的なものを支援」とある。東川町は自分たちに必要な人材や施策がわかっている。ならば遠慮はいらない」と事業費を加減せず申請する。その結果、道内では札幌市に次ぐ規模の交付金を獲得したとされる。

## 硬化した今の社会を揺さぶる辺境の町

こう書くと、東川町は深謀遠慮な人の集まりのように見えるが、実態はまるで違う。写真通りにおおらかで友好的な、また会いたいと思うような人ばかりである。

「東川町はわかりにくい」と冒頭に記したが、それはこちらが古い考えに捉われていたから。従来のまちづくりは一つの「売り」をつくらうとしがちだったが、それがコケたらおしまいだ。東川町は職員自ら各地を回っているから、それがわかっている。「写真の町」の企画会社が倒産し、自分たちでやらなければいけなかった経験が、今に生きている。

廃止案もあった「写真の町」を続行し、平成の市町村合併を蹴飛ばし自立の道を選び、水道網は「いらぬ」と決めた東川町の人たち。課題が浮かぶと役場の職員、農業者、木工職人、商店主など一家言ある人たちが膝をつき合せて夜な夜な語り合ったと聞く。まるで自分たちの地域を自らの手で治めていた江戸時代の農村のようではないか。開拓時代、鉄砲を手に自衛した先人の姿とも重なる。ターニングポイントとなった「写真の町」宣言から36年。今も東川町は多面的な魅力をつくらう

と人脈を広げ、新たな事業に投資を続ける。その一つが、実るまでに長い年月を要する教育だ。東川町は子どもたちの教育に力を入れ、留学生も多数受け入れている。「留学生が東川町に留まるのは職場から限度がありますが、隣町で就職すればその町の人の役に立ち、ひいては日本全体のためになります」と松岡町長は語る。東川町が、自分の地域と日本の未来を見据えていることがよくわかる。

歴史学者の故・増田四郎は、ヨーロッパの古代が減んで中世という新しい世界が生まれた理由を探るなかで、ある社会が次の段階へ発展するとき、その中心部から少し離れた周辺や辺境地区に新しい力が生まれ、それが基点となって変化させるケースが多いことを見出し、「辺境変革論」と名づけた。

これまでのやり方が通用しない今、延長線上にはない新たな社会像が必要だ。課題ばかりの日本であきらめにも似た感情を抱く人は多いかもしれないが、残業を重ねながらも生き生きと働く職員たち、自分の夢をキラキラした目で語る住民たちに会って、おぼろげながら突破口が見えた気がする。

東川町を辺境と言うと怒られるかもしれないが、北海道出身者も正確にその場所を言い当てられないような小さな町で、「未来への開拓」が今日も進められている。



提供：法政大学エコ地域デザイン研究センター

## 現代に生きる海中渡御

陣内秀信

海に囲われた日本には、各地に神輿を海に入れる海中渡御とぎよが受け継がれている。小学生の頃、2年間住んだことのある神奈川県・茅ヶ崎の海岸で、神輿が海に入る「浜降祭」を見て驚いたのを記憶している。そして、真鶴の「貴船祭り」では、この町に調査に通った陣内ゼミの学生達が、地元の男どもと一緒に神輿を担いで海に入ったのには、近くで見ているこちらも興奮を抑えられなかった。

だが、何と言っても凄いのは、この大都会、東京のベイエリアで今なお海中渡御が行われているという事実だ。十数年前の6月、私はお台場海浜公園の入り江で行われる品川・荏原神社の海中渡御を間近で見た。スペインのサラゴサで開催された水をテーマとする国際博覧会のために、水都東京の映像制作を依頼され、プロの映像作家とカメラマンにこのシーンを撮影してもらったのだ。

品川を出航した10艘ほどの船が東京湾の水上を厳かにパレードしながら、人々が待ち受けるお台場公園の入り江に入ってくる。触先を浜に向けて船が勢揃いしたところで、神輿が降ろされる。海の中で男たちの担ぐ神輿が威勢よく揉まれ、太鼓と笛の音が水辺に高揚感を生む。背後には、レインボーブリッジとその向こうの高層ビル群が控える。誰もが恍惚感にひたりながら、小一時間ほどであろうか、劇的な海中渡御の祭礼が続いた。巨大都市、東京のなかで信じられない光景を目の当たりにし、日本文化の不思議さに私は大きな感動を覚えた。



Hidenobu Jinnai

1947年福岡県生まれ。法政大学特任教授。中央区立郷土天文館館長。アマルフィ名誉市民。イタリア建築・都市史を主な研究領域とする。著書に『水都 東京』（筑摩書房）、『東京の空間人類学』（筑摩書房）、『都市を読む・イタリア』（法政大学出版局）、『ヴェネツィア——水上の迷宮都市』（講談社）などがある。

# 南北朝争乱期における 筑後川の戦い

## 南北朝争乱

元弘3・正慶2年(1333)鎌倉幕府が滅亡する。後醍醐天皇は、武家政権が崩壊して天皇親政に取り掛かり、「建武の中興」を開始する。近藤靖文著『九州南北朝争乱―懐良親王と九州征西府』(自費出版・2015)によれば、建武の中興とは、お互いに相矛盾する復古(過去)と革新(未来)が奇妙に同居しながら、天皇が意思を示す文書・論旨中心の天皇専制独裁という形の天皇親政が推進されたと論ずる。

建武2年(1335)鎌倉で北条時行らによる「中先代の乱」が勃発し、足利尊氏はこの乱を鎮圧し、後醍醐天皇への建武政府の反意を表明し、さらに建武3年(1336)、兵庫湊川で楠木正成・新田義貞を破る。京都を制圧した尊氏は光明天皇を擁立し、北朝方室町幕府を確立した。後醍醐天皇は吉野へ逃れ、南朝を開き、南北朝争乱の時代が始まる。元中9・明德3年(1392)南北朝合一がなるまで、この間、全国で南朝方と北朝方の武将らは熾烈な戦いを続けた。

## 南北朝争乱の経緯

次のように南北朝時代の九州を中心とした関係年表を記してみる。

- 1338年 足利尊氏征夷大將軍に任命される。
- 1339年 南朝方懐良親王征西將軍に任命される。
- 1342年 後醍醐天皇が崩御。
- 1350年 懐良親王九州下向のため、忽那島から薩摩に到着、谷山城へ入る。
- 1350年 足利直冬大宰府に入る。高師直と足利直義の対立から幕府分裂し直義派挙兵(観応の擾乱)。
- 1351年 足利直冬鎮西探題に任命される。懐良親王、菊池武光とともに筑後に進攻する。
- 1352年 足利直冬九州を去る。
- 1353年 懐良親王筑後高良山に移る。
- 1358年 足利尊氏亡くなる。



## 古賀 邦雄

こが くにお

古賀河川図書館長  
水・河川・湖沼関係文献研究会

1967年西南学院大学卒業。水資源開発公社(現・独立行政法人水資源機構)に入社。30年間にわたり水・河川・湖沼関係文献を収集。2001年退職し現在、日本河川協会、ふくおかの川と水の会に所属。2008年5月に収集した書籍を所蔵する「古賀河川図書館」を開設。平成26年公益社団法人日本河川協会の河川功労者表彰を受賞。

1359年 少弐頼尚、懐良親王らの大宰府進攻に備え、筑後川北岸鯉坂庄(小郡市大保原)に布陣する。

少弐軍と懐良親王・菊池武光軍と筑後川の戦いで死闘を繰り返す。親王派が辛くも勝利する。

1361年 懐良親王大宰府に入る(大宰府征西府成立)。

1371年 今川了俊九州探題として豊前国門司に入る。

1372年 今川了俊の軍勢が大宰府を掌握。征西府は高良山に撤退する。

1373年 菊池武光亡くなる。

1374年 今川軍、高良山を攻略し、征西府は菊池へ撤退する。

このころ、懐良親王、征西將軍職を後征西將軍宮・良成親王に譲る。

1383年 懐良親王、八女市星野村で薨去。

1392年 南北朝合一がなる。

1395年ころ 良成親王、八女市矢部村で薨去。

## 南北朝争乱の書

水野大樹著『南北朝動乱』(実業之日本社・2017)は、後醍醐天皇が京都より吉野へ入った1336年から、後龜山天皇が京都へ帰るまでの約60年間、二つの朝廷が並び立つ時代があったことを活写する。鎌倉幕府の弱体化から建武の新政、足利尊氏の反旗、そして京都、奈良、隠岐島、九州を舞台として、新田義貞、楠木正成ら、太平記の主役たちの動きを捉える。

室町幕府を二つに裂いた足利尊氏と直義兄弟の戦う亀田俊和著『観応の擾乱』(中央公論新社・2017)、石原比伊呂著『北朝の天皇』(中央公論新社・2020)は、室町幕府に翻弄された皇統の実像を追う。新井孝重著『悪党の世紀』(吉川弘文館・1997)の悪党の派手な鑑兜、光きらめく太刀、長刀のいでたちは反逆の象徴であった。ゲリラの楠木正成、バサラの佐々木道誉ら交えた内乱でうごめいた人間を追う。小川信監著『南北

**朝史100話**（立風書房・1991）は、南北朝動乱に生きた人々、護良親王、北畠顕家、吉田兼好、光厳天皇、今川了俊らの人間性を描き出す。荒木栄司著『九州太平記』（熊本出版文化会館・1991）は九州における南北朝の争いを描く。童門冬二の『南北朝の梟』（日本経済新聞社・1991）は、北畠親房の活躍を描いた小説である。

## 懐良親王の生涯

懐良親王の人生は、戦いの一生だといえる。坂井藤雄著『征西將軍

**懐良親王の生涯**（葦書房・1981年）、天本孝志著『九州南北朝戦乱』（葦書房・1982）、福岡縣教育會編・発行『征西將軍宮と五條氏』（1936年）、佐々木四十臣校訂『懐良親王と三井郡』（大原合戦650周年実行委員会・2009年）、森茂暁著『懐良親王』（ミネルヴァ書房・2019）をひも解けば、北朝方との戦いの連続であった。

後醍醐天皇の皇子懐良親王は、九州平定の任を受けて、6歳にて征西將軍となって、五條頼元らと、延元3年（1338）8月伊勢の大湊を出航して瀬戸内海に入り、讃岐を経由して忽那島（松山市）に上陸。ここで九州への渡海の機を窺いながら滞在する。

興国3年（1342）6月谷山城（鹿児島市）に入った親王は、ここでも6カ年の滞在を余儀なくされる。目的地の菊池に到着したのは、吉野（奈良県）を出て10年目のことだった。この間親王は五條頼元らの指導を受け、文武両道を身に付け、たくましく成長。

九州平定を目指して戦いを繰り返した親王は、正平14年（1359）筑後川の戦いで菊池武光らの奮戦もあって勝利するが、南朝方も多くの死傷者が出た。その2年後、ついに大宰府に征西府を設置し、以後12年間が九州南朝方の全盛期だった。

文中元年（1372）8月九州探題の今川了俊によって大宰府を追われた親王は高良山に御在所を構えるが、そこも追われ、矢部川水系星野川流域の天然の要害・八女市星野村へ退き、このころ征西將軍職を良成親王に譲られ、晩年の6年間は信仰の生活であった。北方謙三の小説『武王の門（上・下）』（新潮社・1989年）は、懐良親王の九州征討とその夢を追う。

## 筑後川の戦い

日本三大合戦は、関ヶ原の戦い、川中島の戦い、そして筑後川の戦い（大保原合戦、大原合戦ともいう）である。南朝方の後醍醐天皇派・懐良親王・菊池武光らの征西府軍4万人と北朝方の足利尊氏派・少弐頼尚・大友氏時ら6万人が九州の覇権を巡って、筑後川中流域の右岸から福岡県小郡市大保原にかけて戦う。両軍の戦死者は5400余人、負傷者2万5000人とされている。

山下宏明校注者『太平記・五』（新潮社・1988年）の第33に描かれている



小郡市中学家庭教育学級編『大原合戦』（小郡市教育委員会・1989年）には、菊池武光は大奮戦、懐良親王もまた自ら敵軍へ突入、親王の馬は射倒され、身に三カ所の深手を受け、生け捕りにしようとする少弐勢に自分の体を盾にして鎧の袖を広げ、矢を防ぎ、まさに危機一髪、新田勢が駆けつけ、親王はかろうじて死地を脱し、福童原に退き、谷山城に逃れた。武光は、「もはや一兵たりとも生きて還るな、我とともに討死せよ」と怒号し、阿修羅の如く敵陣へ詰め寄ったとある。

この戦いで、南朝方は勝利したが、多くの死傷者を出した。菊池一族の書として、植田均著『純忠菊池史乘』（菊池史談会・1929年）、陸上自衛隊第八師団司令部編・発行『誠忠菊池史代史』（1969年）、荒木栄司著『菊池一族の興亡』（熊本出版文化会館・1989）、杉本尚雄著『菊池氏三代』（吉川弘文館・1966年）、森藤よしひろ・絵『まんが風雲菊池一族』（菊池白龍会・2005）がある。

## 筑後川の戦いの遺跡

宮ノ陣郷土史研究会編『宮ノ陣郷土史読本』（宮ノ陣校区まちづくり振興会・2016年）には、筑後川流域沿いに、その戦いの遺跡が掲載されている。久留米市・宮ノ陣神社には、懐良親王がお手植えの「將軍梅」が紅梅の花を咲かせる。神社と隣接する法龍山遍萬寺の境内地に、「筑後川の合戦の碑」が建立されている。筑後川の戦いで倒れた兵士の冥福を祈り続けている寺でもある。この寺の近くに、両軍の遺骨を集めて供養した五万騎塚が建つ。

小郡市大保原近くに鎮座する大中臣神社には、戦いで深手を負った親王が傷の回復を祈願したところ、その加護で全快したことに感謝して、藤ノ木が植栽された。「將軍藤」と呼ばれている。小郡市役所に隣接する公園には大保原戦跡の碑が建つ。

大刀洗町は菊池武光が血刀を川で洗ったという故事に由来する。公園には勇者姿の「菊池武光銅像」がそびえる。この大刀洗川上流筑前町には「菊池武光大刀洗之碑」が建つ。

## おわりに

太郎良盛幸・佐藤一則の小説『九州の南朝』（新泉社・2012）は、懐良親王が、矢部川支川星野川が流れる八女市星野村で亡くなるまで、また良成親王が矢部川の源流八女市矢部村で亡くなるまでを描いている。

特筆することは、五條家・堀川家臣団が、未来に向けて、一族の経済的な確立を図るために苦勞しながらも、小河川、溪流水、湧水を利用して女鹿野・別当・竹原・牧曾根・鍋平地区などにおける棚田づくりを行なったことである。現在、山奥まで水田が拓かれている。牛島頼三郎著『奥八女 矢部峽谷の棚田考』（梓書院・2020）は、山間部の棚田を拓き、両親王の魂がたくましく生き続けていることを論ずる。

人口減少期の地域政策を研究する中庭光彦さんが全国を訪ね歩き、「地域の魅力」を支える資源やしきみを解き明かしてきた連載「魅力づくりの教え」。今号が最終回となります。今回の舞台は、中庭さんが足繁く通っている岐阜県高山市です。



# 〈つくる技術〉が

# 受け継がれる 森のまち

(岐阜県高山市)



## 中庭 光彦

なかにわ みつひこ

多摩大学経営情報学部  
事業構想学科教授

1962年東京都生まれ。中央大学大学院総合政策研究科博士課程退学。専門は地域政策・観光まちづくり。郊外・地方の開発政策史研究を続ける一方、1998年からミツカン水の文化センターの活動に携わり、2014年からアドバイザー。「コミュニティ3.0 地域バージョンアップの論理」(水曜社 2017)など著書多数。





2



3



4



1 高山の旧市街を流れる「宮川」。神通川水系の本流で、飛騨高地を北に流れて富山湾へ注ぐ 2 江戸時代から米市、桑市、花市として続く「宮川朝市」 3 国内に唯一現存する高山陣屋。高山城主金森氏の下屋敷の一つだったが、幕府の直轄地となってからは江戸から来た代官や郡代がここで政治を行なった 4 高山陣屋の前で新鮮な野菜や果物、花などが並ぶ「陣屋前朝市」

## 若き木工技術者が集まる場所

水循環を守ることは森を守ることと一体だ。しかし、その森が、担い手不足で荒れているという。「水と緑を守るう」と耳当たりのよい言葉だけでは水文化は守れない。水と人間の見えない関係を創らなければ、水と木の文化は途絶えてしまう。そうならない一つの方法は、価値の高い木材加工品を提供する技術を磨くことであろう。国産材を扱い人づくりまで手が回る企業は少ない。しかし、なかには地場産業として木工が持続し、若い木工技術志望者が集まってくるまちもある。岐阜県高山市だ。技術者を育てることは、文化を伝え創ることでもある。高山市に木工職人を育てている企業があると知り、訪ねることにした。

## 何度も同じまちに足を運ぶ意味

人は、自分の好みの場所をもっている。何回訪れても飽きずに、また足を運んでしまう場所だ。私の場合、それは飛騨高山だった。学生時代から鉄道や車で何十回と足を運んだ。町の中心を流れる宮川の中橋を渡る祭の屋台にほれ

ぼれし、伝建(注)の町家を眺め民芸色豊かな土産物を買ひ、飛騨牛も食べる。何度足を運んでも、そのたびに発見がある。それだけ高山のまちの文化の層が厚いうえに変化し、こちらも年齢を重ねるとわかることが多くなる。土地と訪問者の「解読し合うコミュニケーション」が成立しているということだろう。

初めて足を運んでから40年。私は、1960年代後半からの記憶しかない東京者、つまりは既製品ばかり並ぶ世の中しか知らない「文化的なイナカ者」にとって、高山は別世界で、以後、私を惹きつける場でありつづけている。

## 金森安治が見出し広めた高山の魅力

高山を気に入った文化人は多いが、その一人に『暮しの手帖』編集長で高山の観光化に一役買った金森安治がいた。1963年(昭和38)『暮しの手帖』第一世紀72号に「山のむこうの町——日本紀行その2」という特集を掲載した。そこで描かれた高山は観光地へ歩みはじめたころだ。町家が似ているため「小京都」と呼ばれはじめた高山を意識して、こう記している。

(注) 伝建

伝統的建造物群保存地区の略称。文化財の分類の一種で、歴史的風致を形成している伝統的な建造物群で価値が高いもの、保存のために市町村が都市計画や条例で定めた地区。



「まわりをぐるっと山にかこまれたこの町を、〈小さい京都〉と呼ぶのは、適当ではない。みたところ、町の作り、家の作りは、京風をまねたとしてもこの人口五万の町には、京都にないものが一本流れている。つましく、しずかで、ひとに媚びない気がまえ、それがこの町をつつんでいる。

私たちが、とつくに忘れていたもの、戦後の日本には、もうどこにも見あたらないものとあきらめていたもの、それがこの山々にかこまれた、この小さな町に今日もちゃんと生きているのである。」

既製品ではない手づくり感の美を高山に見出したこの特集後、高山の人氣に火がつくことになる。

花森は編集者を超えて、己の目になかった品を紹介する。暮らしのプロモーターであった。誌面では「飛驒の匠」の技術を背景とした曲木の家具や旦那衆の古民家を紹介した。

地元の方々が誇りをもって「飛驒の匠」という言葉を使う通り、高山は森にくるまれ、木工技術者が集まったまちだった。

## 飛驒の匠を育てた 扱いにくい樹種

「飛驒の匠」の歴史は古い。71

8年(養老2)の文書に、その名が見られる。藤原京の造営にかかわったらしい。

飛驒の匠の技術がこの地方に受け継がれた背景には、豊かな樺林があった。樺の森の土は水をよく含むが「木偏に無」と書くように、木材としては扱いにくい。

飛驒の匠はこの木を家具や

住宅に加工する技術をもっていた。

時は下って1920年(大正9)、高山の人々が地場産業を起こそうと中央木工株式会社をつくる。高山には江戸天領期からの旦那衆がおり、木工技術者もいた。そこにやる気が加わって会社ができ、4年後には飛驒木工に名前が変わる。今回伺ったのは、100年前に創業された歴史ある企業である。

## 時代ごとに飛驒の匠を 必要とさせた戦略

飛驒木工の創業3年後に関東大地震が起き、復興需要が生じた。復興を手助けするために、あえて家具の値段を下げて売ったという。その時に生まれた卸問屋との関係は戦後まで続く。

戦後、飛驒産業と社名が変わったその歴史を見ると、教科書には載らないような思わぬ需要と、そ



の意図せざる結果の連続だ。日本が満州や東南アジアに進出した時には、現地で日本人が使う家具を提供した。戦争が始まると、軍の木製飛行機製造計画に応じ、木製の燃料タンクもつくっている。

戦後になると何万人もの米国人が家族を連れて進駐した。そして、ディペンデント・ハウスと呼ばれる占領軍用家族住宅の家具を製造した(有名な所では現在の代々木公園にあったワシントンハイッだろ。1964年の東京オリンピックでは選手村に使われるため日本に返還された)。

その後、米国に曲木の椅子を大量に輸出した。時は高度成長期の住宅不足期だが、内需よりも外需に依るのに忙しかった。

1965年(昭和40)ごろが輸出のピークだが、驚くのは、当時の社長で高山の市長も務めた日下部禮一が「360円の固定相場レ

トで輸出できなくなる時が来るので、商品開発、営業戦略を立てなさい」と指導したことだ。これがドルショックとして現実になるのは1971年(昭和46)。旦那衆の末裔の日下部が、いかに慧眼で情報をもっていたかがわかる。

こうして高度な技術が必要な家具を高付加価値で販売しつづけた。それは「飛驒の匠」の技を受け継ぐことに直結していた。

その会社が、飛驒の匠の後継者を育てるために「飛驒職人学舎(以下、職人学舎)」を2014年(平成26)に開校した。

## 都会にはあまりいない 清々しい若者たち

ここまで話してくれた飛驒産業株式会社取締役営業企画室長の森野敦さんは「人を育てるきっかけは、秋山木工社長の秋山利輝さん



5 戦時中に高山で行われていた木製燃料タンクづくり 提供:高山市 6 4代目市長(1947年4月~1959年4月)の日下部禮一。飛驒産業の社長も務めた 提供:高山市 7 飛驒産業株式会社取締役 営業企画室長の森野敦さん 8 飛驒産業の製造工場で用いられる現在の曲木技術





9



12



11



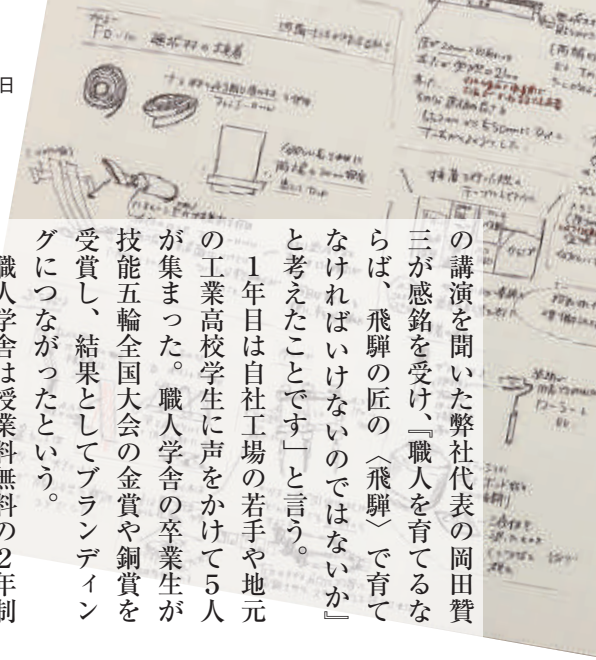
10



13

9 真剣な眼差しで取り組む飛騨職人学舎の生徒 10「飛騨の匠」の技を受け継ぐ手  
11生徒と話す指導者の玉田義卓さん 12こうした木工道具も生徒たちが自分でつくっている 13一流の木工家具職人を目指す飛騨職人学舎の生徒たち

一人ひとりがその日を振り返って記す  
作業日誌



の講演を聞いた弊社代表の岡田賛三が感銘を受け、「職人を育てるならば、飛騨の匠の〈飛騨〉で育てなければいけないのではないかと考えたことです」と言う。

1年目は自社工場の若手や地元工業高校学生に声をかけて5人が集まった。職人学舎の卒業生が技能五輪全国大会の金賞や銅賞を受賞し、結果としてブランディングにつながったという。

職人学舎は授業料無料の2年制で、その後は飛騨産業の社員として2年勤めることになる。

「同じ年齢の社員と比べると技術

的に差があります。また共同生活しながら学んでいますので、挨拶一つ違うし、道具の扱い方も違う。若手や中堅社員にいい影響を与えています」と森野さんは言う。

現在は9人が在籍するという職人学舎の作業場に伺った。教室に入ると、一年生の6名の若者が道具を手に作業しているのだが、部屋の空気が違う。目の前の仕事に打ち込んでいる学生の目と手に、清々しさを感じるのだ。最近、私は都会の若者の清々しい姿を目にした記憶がない。ホッとしてみ

私が入るとすぐに指導者の玉田義卓さんが促し、学生たちが足早に1列に並び自己紹介を始めた。出身地は山形、神奈川、新潟、東京と都市部が多い。

口数が少なく、「先輩の技を見て盗め」という職人的な雰囲気を感じていたのだが、そんなことはまったくくない。日々を振り返るノートを見せてもらったが、絵や言葉で自分の作業内容と体感が具体的にわかりやすく書かれていた。

学生の一日は毎朝5時半の起床とランニングから始まる。共同生活で携帯電話・スマートフォン禁止。それをわかつたうえで、覚悟をもって来ている。

壁を見ると「飛騨職人学舎職人心得30箇条」が貼られている。

「1. 挨拶のできた人から現場に行かせてもらえます。2. 連絡・報告・相談のできる人から現場に行かせてもらえます……」と続き、「28. お金を大事に使える人から現場に行かせてもらえます。29. そろばんのできる人から現場に行かせてもらえます。30. レポートがわかりやすい人から現場に行かせてもらえます。」とある。

職人心得と書いてあるが、これは、現代の組織人が得て忘れてしまう、人と人、人と道具の関

係を記している。つまりは「つくる技術の心」の構えであって、現代の組織人が何かをつくる時の心得にもなっていると、私には思えた。

**魅力伝える  
ということ**

魅力や文化をつくる場の具体的な一例は、今回訪れたような職人の現場なのだろう。

デジタル化が叫ばれている現在ほど、もの・サービスを「つくる技術」が求められている時代はない。気候変動の危機が叫ばれている現在ほど、人や道具を通して水や木の発する生態系サービスと対話できる「つくる技術」が求められている時代はない。

水文化は見えない。見えないが、わかるうとすれば、人と人の関係のなかに埋め込まれた水利用の意味を解釈して創る技術が必要だ。それをもった人々を、水循環のあらゆる現場で育てることが水文化をつくることになる。そうした「つくる技術」があふれている場所こそが、魅力づくりの本質と言える。

高山で「飛騨の匠」を育てる。これをたんなる一例にしてはならない。

(2020年12月4〜6日取材)

16  
魅力  
つくりの  
教え



オンラインセミナー

# 江戸東京への舟運

## ～古文書でたどる酢の軌跡～

開催しました



今回のオンラインセミナーでは東北学院大学の齋藤先生に、江戸時代後期に台頭してきた、尾州廻船を含む新興海運勢力と、それにより再編された全国物流網、江戸の舟運を担った船の種類についてお話いただき、ミツカン水の文化センターの設立にもつながる、ミツカングループの創業期に酢が尾張半田から江戸に運ばれた背景を解説いただきました。

また、一般財団法人招鶴亭文庫が所蔵する「中荏家とすしや与兵衛との書簡」や「関東大震災発生時の様子を報告する葉書」などの古文書をひも解き、酢が江戸の食文化に貢献した姿や、災害時にも船で酢を江戸に運びつづけた歴史を感じられる内容でした。

オンラインセミナーの後には、齋藤先生と希望者によるオンライン交流会を実施しました。短い時間でしたが、齋藤先生との会話を楽しんでいただき、遠方からの参加者を含め、オンラインならではの交流の機会となりました。

今回は、初めての“オンラインセミナー”開催となりましたが、全国各地より多くの方にご参加いただくことができました。「江戸東京への舟運～古文書でたどる酢の軌跡～」の講義動画や講義資料は、Webサイトからご覧いただけます。

当日ご参加いただけなかった方も、もう一度視聴されたい方も、ぜひご覧ください！

[http://www.mizu.gr.jp/news/201128\\_report.html](http://www.mizu.gr.jp/news/201128_report.html)

(2020年12月8日のお知らせに掲載しております)

日時：2020年11月28日(土)

13:30～16:00

会場：オンライン (Zoomにて配信)

参加者数：オンライン講義 73名

オンライン交流会 7名

講師：齋藤善之(さいとう よしゆき)さん

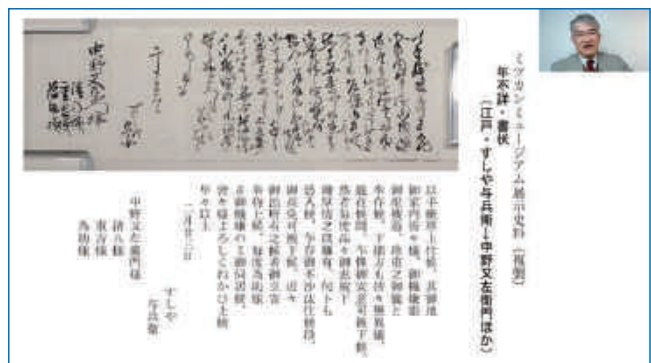
東北学院大学教授

主催：ミツカン水の文化センター

共催：一般財団法人 招鶴亭文庫



講師を務めた東北学院大学教授の齋藤善之さん



齋藤先生は古文書などを用いて講義

### 機関誌『水の文化』66号に関する訂正とお詫び

『水の文化』66号の記事について誤記がありましたので、お知らせいたします。

p26『農具便利論』の説明文

誤 大川永常著

正 大蔵永常著

すでにお手元に届いている読者の皆さまに訂正してお詫びいたします。

### 機関誌『水の文化』制作について

ミツカン水の文化センターで発行しております機関誌『水の文化』67号につきましては、感染防止対策を徹底しつつ取材活動を行いました。

取材先の皆さまには、顔写真撮影に関してマスクを外していただくなどのご協力をお願いいたしました。この場をお借りし

て御礼申し上げます。

また、ご好評いただいております連載「食の風土記」「Go! Go! 109水系」はやむを得ず休載といたしました。

68号以降も感染防止対策を徹底したうえで、機関誌『水の文化』を制作してまいります。

## 水の文化 Information

### ■「水の文化」に関する情報をお寄せください

本誌「水の文化」では、今後も引き続き「人と水のかかわり」に焦点をあてた活動や調査・研究などを紹介していきます。

ユニークな水の文化楽習活動や、「水の文化」にかかわる地域に根ざした調査や研究がありましたら、自薦・他薦を問いませんので、事務局まで情報をお寄せください。

### ■ホームページのお問い合わせ欄をご利用ください

<http://www.mizu.gr.jp/>

### ■水の文化 バックナンバーをホームページで

本誌はホームページからPDFファイルとしてダウンロードできるほか、冊子をご希望の方はホームページの「最新号のお申し込みボタン」からお申し込みいただけます。どうぞご利用ください。

### ■「水にかかわる生活意識調査」ホームページで公開中

20年以上にわたり、ほぼ同じ内容で日常生活と水とのかかわりや意識、水と文化に関する生活意識調査を実施しています。結果はすべて公開していますので、ぜひご利用ください。

## 皆さまの感想を お待ちしております！

『水の文化』67号について、アンケートにご協力ください。  
今後の機関誌をよりよくしていくための参考にさせていただきます。

◆アンケートへの回答はこちらから。

<http://www.mizu.gr.jp/form67.html>



※アンケート用紙をお持ちの方は、FAXまたはメールにて  
下記へご返信いただく形でも結構です。

FAX：03-3568-4025

メールアドレス：mizubun@mizu.gr.jp

### 編集後記

取材後、東川のやる気や活力はどこから湧き出ているのか  
と思いを巡らせた。移住者が多いこと人口が増えることは、  
魅力ある「まちづくり」の結果ではあるが、これは目的で  
はないのだろう。彼らにとって、この地の住民に限らない  
社会全体や、30年50年先の次世代に継げられる価値の創造  
意欲こそが原動力であり、このエモーショナルキャピタル  
は、水とともに東川の大切な資産だと思う。(五)

長年、アドバイザーの鳥越先生から、面白い町があるよと  
紹介されていた東川町。「水」とどまらぬ魅力満載の秘訣  
は、役場の方々が住民の幸せを第一に考えていることに端  
を発する、信頼感の連鎖だと感じた。そして信頼感あるコ  
ミュニティは災害時の備えともなる利点も。移住なんて考  
えたこともなかったが、終の棲家について真剣に考えてみ  
ようかな、と感化されてしまった。(松)

移住生活の経験があります。残念ながらその土地からは引  
越してしまいましたが、東川町のような温かい土地だつ  
たことを思い出しました。現在の住まいは東京ですが、東  
川へ移住した方々のインタビュー記事を読んだ時、こんな  
場所ですらしてみたいなと羨ましく、また過去の移住生活  
が懐かしく思い出されました。(飯)

2012年に「世界のこどもの椅子展」という展覧会に関  
わった。19世紀から近年までにデザインされた子ども用の  
椅子を集めた展覧会だが、その企画の目玉として「君の椅  
子」の展示をした。その期間中、東川町の役場の方が足を  
運んでくれて、「水」や「写真」など東川町の魅力をアピ  
ルしていたのが印象に残っている。今回の記事を読むと、  
そのフットワークの軽さや熱心さを思い出す。(力)

東川町滞在中のわずかな空き時間。59号の取材で習い覚え  
た日本古来の毛鉤釣り「テンカラ」を忠別川でも試みよう  
と、地元の人に釣り場を尋ねた。「そのへんで釣れますよ」  
と言う。耳を疑った。町の中心部なのに？半信半疑で川に  
毛鉤を投げると「バシャ」と魚が食いついた。ニジマスだ！  
水面を割って宙を舞い、水中に潜っては魚体をくねらせる。  
「こんな町なかで!？」と驚くしかなかった。(前)

ミツカン水の文化センター機関誌

水の文化 第67号

ホームページアドレス

<http://www.mizu.gr.jp/>

発行日

2021年(令和3年)2月初版1刷

企画協力 (氏名50音順)

沖 大幹 東京大学大学院工学系研究科教授  
古賀邦雄 水・河川・湖沼関係文献研究会  
陣内秀信 法政大学名誉教授  
鳥越皓之 大手前大学学長  
中庭光彦 多摩大学教授

制作

浦本五郎  
松本裕佳  
久保田瑞季  
青木広実  
小林夕夏  
久保悦史  
飯野真奈実

編集製作

前川太一郎 編集  
中野公力 デザイン・撮影  
蔵田 豊 デザイン

執筆

佐々木 聖  
手塚ひとみ  
開 洋美  
前川太一郎

撮影

葛西亜理沙  
川本聖哉  
藤牧徹也

印刷

中埜総合印刷株式会社

発行

ミツカン水の文化センター

〒104-0033 東京都中央区新川 1-22-15 茅場町中埜ビル

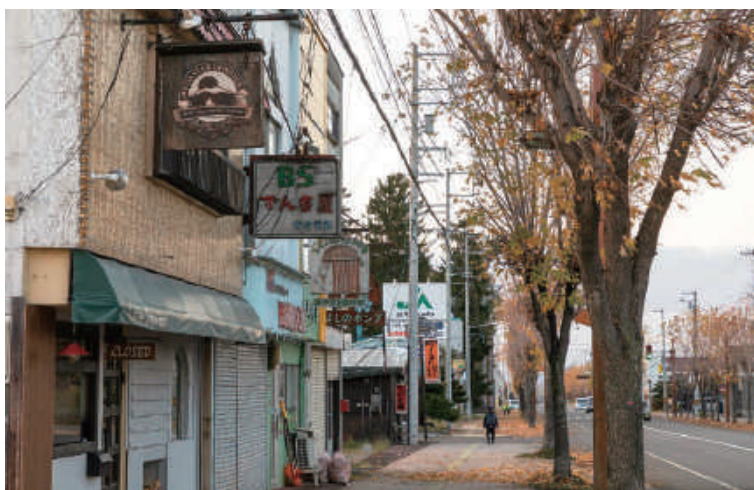
株式会社 Mizkan Partners

Tel. 03 (3555) 2607 Fax. 03 (3297) 8578

※禁無断転載複写転売



## ミツカン水の文化センター



表紙:東川町のシンボル「大雪旭岳  
源水」そばのせせらぎと、東川町のさま  
ざまな魅力を表す写真群。この町の  
人々は大雪山連峰が育む水とともに  
生きている 撮影:川本聖哉

(上)冠雪した大雪山連峰を望む。右端のピークが  
東川町の象徴的存在である旭岳(標高2291m)  
撮影:藤牧徹也  
(下)そこかしこに木彫看板がある東川町の中心市  
街地 撮影:藤牧徹也

